



沖縄発
317号

「沖縄の声」を聞いてください

— 少女暴行事件に想う —

雨中に燃えあがった沖縄の怒り

桑江テル子

危険な隣人は要らない!緊急女性集会

頻発する米軍凶悪事件、女性への性暴力を許すな

高里 鈴代

インタビュー 少女の安全を守りたい—本土も基地負担を
米軍犯罪の根絶は、基地撤去しかない

東門美津子

被害者をセカンド・レイプから守ろう

糸数 慶子

米兵による少女暴行事件を沖縄から告発する

永吉 盛元

知事や政治家の「甘い認識」

狩俣 信子

基地と軍隊を裁く——日本政府も、米軍犯罪に加担

比嘉 京子

沖縄だから、許されるのか

安里 英子

「自分の子ども」と思って

仲村 未央

「またも被害者を生んだ」自責のなかで

玉那覇淑子

「イラクからユニオン」へ

浦島 悦子

基地ある限り 事件・事故は、なくなる

富田 沙織

軍事で平和はつぐれない

西村あやこ

「大阪の女」も、立ち上がった

篠原 孝子

松野尾かおる

座談会 **根源を断つには、基地問題に、どう立ち向かうか**
レイプされ続けるヤポネシア(沖縄をふくむ日本) 平山 基生

川

宮城 隆尋

同じ肌の色をしている

同じ髪の色をしている

同じ言葉を話す

同じ文字を使う

わたしとあなたの間には

川が流れている

太平洋よりも広く

マリアナ海溝より深い川

これは、ニッポン(人)の問題

全世界に展開する米軍の性犯罪が、このところ増え続けていると、米国防総省の報告書は語っている(琉球新報、〇八年三月六日)。被害者が、起訴を途中で取り下げた事例も、〇五年は三三七件なのに、〇六年は六七〇件と倍増している。

去る二月、沖縄で起きた「中学生暴行事件」は、基地外に居住する米海兵隊二等軍曹が、基地外で起こした事件だった。被害者と一緒だった友人たちが、すぐに警察に通報したため、地元警察が身柄を拘束。取り調べが開始されたのだが、極めて残念なことに、ヤマトの週刊誌がプライバシーをえぐり出す報道をし、インターネット上では、少女とその関係者へのセカンド・レイプが乱れ飛び、二〇日後に提訴は取り下げられた。

犯人は釈放され、日本の裁判権は放棄された。

「日米同盟」の名で、「日本人の安全を守るために」駐留している米軍。その構成員が、わが子ほどの幼い子を、言葉巧みに連れ出し、連れ回し、強姦する暴挙! これは一度や二度ではない。戦後六二年間、毎年繰り返されているのだが、日本国の最高責任者は、いまだかつて謝罪したことはない! 何の責任も、とっては、いない!

沖縄という、日本全土のわずか〇・六%の狭い領土(一三〇万人の国民が生きている)に、日本在住米軍の七五%の基地を過密配備し、犠牲を強いているニッポン。何か大きな事件があると、ときどき思い出すが、日常におぼれ、「沖縄の問題」と決めこみ、平和をむさぼる日本本土人の、深層心理はどうなっているのか。

決して「沖縄問題」ではない。「日本の問題」として考えてもらいたい。(桑江テル子)



317号 「沖縄の声」を聞いてください——少女暴行事件に想つ

表紙 「沖縄の声」を聞いてください——少女暴行事件に想つ

詩 川 ……………

宮城 隆尋

巻頭言 これはニッポン（人）の問題 ……………

桑江テル子

1

3・23県民大会に 六千人 雨中に燃えあがった沖縄の怒り ……………

桑江テル子

6

緊急女性集会から 本当の平和がほしい 「危険な隣人はいない！」 ……………

比嘉洋子ほか

9

総括 九五年以後、沖縄の状況はどう変わったか ……………

高里 鈴代

30

インタビュー 本土も応分の基地負担を（東門美津子・沖縄市長） ……………

桑江テル子

38

「少女暴行」の根源に憤る

矮小化される少女暴行事件——米軍犯罪の根絶は、基地撤去しかない——

糸数 慶子

46

被害者をセカンド・レイプから守ろう ……………

永吉 盛元

50

米兵による少女暴行事件を沖縄から告発する ……………

狩俣 信子

53

知事や政治家の「甘い認識」 ……………

比嘉 京子

56

基地と軍隊を裁く——日本政府も米軍犯罪に加担 ……………

安里 英子

61



沖縄だから、許されるのか	仲村 未央	64
「自分の子ども」と思つて	玉那覇淑子	68
「またも被害者を生んだ」自責のなかで	浦島 悦子	71
「イラクからユニオン」へ	富田 沙織	74
基地ある限り 事件・事故は、なくならない	西村あやこ	78
軍事で平和はつくれない	篠原 孝子	81
「大阪の女」も、立ち上がった	松野尾かおる	84
座談会 根源を断つには、基地問題にどう立ち向かうか	親川裕子・知念ウシ・友利真由美	88
怒 レイプされ続けるヤポネシア（沖縄をふくむ日本）	平山 基生	100
会と催し		
〈NPO現代の理論・社会フォーラム〉「沖縄研究会」を立ち上げる	牧 梶郎	102
靖国問題を通して日本の平和を考える	内田 雅敏	103
沖縄からは憲法がよく見える	高橋 禮之	104
深まった沖縄県民への感謝と連帯 松本剛記者（琉球新報）の講演	鈴木 彰	105
若者たちも怒りで決起！	桑江テル子	106
読書室 『ザ・レイプ・オブ・南京』	牧 梶郎	108
写真絵本 『こんにちは泡瀬干潟』	桑江テル子	110
編集後記		112



事故に抗議する6000人の県民」の熱気で溢れた（写真提供・琉球新報）



2008年3月23日午後、北谷公園野球場前広場は、「米兵によるあらゆる事件と

雨中に燃えあがった沖縄の怒り

どしゃぶりの雨の中、「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」（三月二三日）に、約六千人の老若男女、家族連れが集結した。そこには、「少女に非はない」「沖縄に非はない」「なぜ加重負担を押しつける？」「不平等な地位協定を、政府はなぜ改めない？」という、怒りと疑問と不信が満ち満ちていた。

県民大会は、「少女暴行事件」がきっかけで、自民党も含めた「超党派」での主催を目ざした。ところが、協議に入った頃から、県議会の一部の議員から「政治色がある」「政治に利用するな」などの発言が目立ち始めた。県議会は、すでに全会一致で、この少女事件への抗議決議を採択したのに、である――。

大会実行委員は、結局、①沖縄県子ども会育成連絡協議会 ②沖縄県婦人連合会 ③青春を語る会 ④連合沖縄（労組） ⑤県PTA連合会 ⑥県老人クラブ連合会の六者で、結成、運営された。

降りしきる雨をしのぐ仮設舞台の演壇に立った実行委員長の玉寄哲永（沖子連会長）氏は、「九五年県民大会で、高校生が「安心できる社会を返してください」とあいさつしたが、私たち大人は、何をしてきたか。被害少女をそとしておいてやりたいが、沈黙すれば容認となる。沖縄の怒りを、日米政府にぶつきたい。人権を保証させる運動の第一歩として、今大会の意義は大きい」と述べた。不参加の方針を決め込んだ側へは「自己利益の姿勢だ」と厳しく糾弾した。

続いて壇上では、北谷町長、沖縄市長、那覇市長が、地域住民を守る立場から、基地の整備・縮小や日米地位協定の不平等性と改訂の必要性を訴えた。

「わたしたちは訴える」として、小渡ハル子（女性）、三宅俊司（弁護士）、中山きく（青年）、大浜敏夫（労働者）、金城喜美代（PTA）、松田正二（自治会）の各氏が、各立場から訴えた。そして最後に性被害者のジェーンさん（仮名、東京在住）が、二〇〇二年、横須賀市でキティホーク乗組員の米兵から受けた性被害を告白。「ケガは直りました。心の傷は永遠です。死ぬまで忘れることはできません」と、日本語で、言葉をふり絞るように語り、万場の人びとに深い衝撃と感銘を与えた。ジェーンさんは、さらに、「ずっと一人だった。だから沖縄の人びとの気持ちがわかる。私はきょうのことを永遠に忘れない。東京に帰って、みんなに伝えたい」と語り、降壇後も、多くの沖縄の人たちと、誓いの握手を交わしていた。

沖縄本島だけでなく、宮古集会、八重山郡民大会も開かれた。どの集会でも、被害少女を批判したチラシが、二二日の産経新聞と世界日報に折り込まれたことへの怒りが渦巻いていた。（桑江テル子）

米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する決議

「私たちに平和な沖縄を返してください。」——一九九五年、繰り返される米軍の事件・事故に抗議し、日米両政府に訴えた県民大会から十三年、そのとき約束された「再発防止」や「綱紀粛正は、むなしく、米軍犯罪は止むことをしらない。

戦闘機・ヘリコプターなどの墜落事故、殺人的な爆音、環境破壊など、県民は、被害を受け続けて

いる。しかも、女性に対する性暴力という凶悪犯罪が、いまだに後を絶たない。

米軍は今回の事件後、夜間外出禁止などの「反省期間」をおいた。しかし、事件後も、飲酒運転、民間住居不法侵入などを立て続けに起こした。日米両政府のいう〈地位協定の「運用改善」〉では、すまされない実態が明らかになっている。

基地被害により県民の人権が侵害され続けている現状をみれば、日米地位協定の抜本改正を行うことが、私たちの人権を守ることにつながる。

十三年前に約束した基地の整理縮小は一向に進まず、依然として広大な米軍基地の重圧に苦しめられている。私たちはあらためて、海兵隊を含む米軍兵力の削減など、具体的な基地の整理縮小を、強く求めていかなければならない。

何ら変わらぬ現状に、県民の我慢の限界は、すでに超えている。

日米両政府は、沖縄県民の訴えを、怒りを、真摯に受け止め、以下の事項を 確実に進めるよう、強く要求する。

記

一、米軍優先である日米地位協定を抜本改正すること。

一、米軍による県民の人権侵害を根絶するため、政府はその責任を明確にし、実効ある行動をおこすこと。

一、米軍の綱紀肅正を厳しく打ち出し、実効性ある具体的な再発防止策を示すこと。

一、米軍基地の一層の整理縮小を図るとともに、海兵隊を含む米軍兵力の削減を図ること。

米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会 二〇〇八年三月二三日

緊急女性集会 危険な隣人は要らない!

桑江テル子／比嘉 洋子／野国 昌春／糸数 慶子／高里 鈴代
松田 正二／東門美津子／崎原美佐子／前田芙美子／知念 ウシ
源河 直子／狩俣 信子／多和田栄子／和田 邦子／仲村 未央
外間 久子／伊波 興信／比嘉 京子／玉那覇秀子 (発言順)

2008年2月19日

於 北谷町ちゃたんニライセンター

司会(桑江テル子) 急な取り組みでしたが、よろこ、
おいで下さいました。司会の桑江です。実りある集会になり
ますよう、皆様のご協力をお願い致します。

ただいまから、「危険な隣人は要らない! 緊急女性集会」
を開会します。

今回の米兵による少女暴行事件は、「またも起こってし
まった事件です。」

九五年に、あれだけの怒りで県民大会が開かれ、地位協
定の抜本改正をはじめ、基地整備縮小や被害者補償、そし
て再発防止を決議し、県に、国に、要求をつきつけ、さま
ざまな動きをして参りましたが、今日また、このような事件
が起こったということは、どういうことでしょうか。

「再発防止策」は、何の実効性もなかった、ということ
ではないでしょうか。

では、今回の事件を契機に、これからどうすればいいの
か、話し合います。今日の集会は、怒りを持って集ま
った皆さんが、それぞれの思いを、それぞれの立場から話
して頂く。それをしっかり受け止めて、その声を声として、
県や国や米国に、要求をつきつけて行く。そういう集会で
ございます。

プログラムに沿って進行します。それぞれの立場からの

発言に続いて、フロアから、一分間スピーチを募ります。

どうぞ、心の準備、発言の準備をしておいて下さい。

一分間は、あつという間です。スピーチを希望する方は、そこに並んでもらって、時間のロスのないように致しますので、ご協力をお願い致します。

なお、マスメディアの皆さんには、集会の趣旨を踏まえ、その倫理をしっかり守って頂くことを、あらかじめお願いをしております。今回の問題は非常にデリケートな問題です。人権蹂躪には、心してみんなが取り組んでいかなければならないと思いますので、よろしくお願いを致します。

それでは呼びかけ三〇団体を代表して、沖縄市婦人連合会（通称市婦連）の比嘉洋子会長から挨拶をお願いします。

基地があるかぎり、子育ては、できない

比嘉洋子（沖縄市婦連） ここは、どこの国ですか？

ここは、どこの島ですか？

なぜ私たちが、私たちの子どもが、

被害にあわなければいけないのですか？

ここは無法地帯ではありません。法治国家であり、法の下に守られて生きているはずです。今回の事件は、絶対に許せません。いたいけな少女が……。

もう何度も起こっています。

そのたびに要請し、抗議し、「二度と繰り返させません」との言葉を聞かされてきました。

でも、それは、言葉だけで、守られていません。

再発、再々発、……、何度もあります。

子どもは私たちの宝。沖縄の宝ですよ。

怒り心頭、頭から火が噴き出しそうです。

なぜ起こるのか？

子どもたちには何の罪もありません。

外に出ては、いけないのですか？

楽しみたい、遊びたい年ごろです。

いつさい出るな、と言えますか？

違いますでしょう。

人間、生きていれば用事もあります。

「それが出来ない」という元凶があるのです。

私たちは、基地に囲まれて住んでいます。

軍の基地に、私たちは入れません。

でもあの人たちは、民間地域への出入り自由です。こんなことがあって、いいのですか。

基地がある限り、このような被害にあうのです。

安心で安全な暮らしをして、初めて「平和」です。

いつも不安で、不安で、

いつ、このような事件が起きるかも知れないという状況で、どう子どもを育て、守れますか。

ほんとうに怒り心頭です。

戦後六三年。戦争に苦しめられ、米軍の事件に苦しめられ、やっと復帰できて平和を取り戻したと思いきや、軍隊は出て行かない。心穏やかに生きられない。

私たちは、もつと声を大にして、安心・安全を勝ち取らなければならぬ。

基地があるかぎり、「宝である子どもたち」は、守れません。

「基地をすべて持ち帰ってくれ」と言いたい。

本当の平和がほしい。

心の底からゆつくり眠れ、すこやかな子育てができるような平和がほしい。

今こそ、心から基地の撤去を要求したい。

司会 母親集団である〈市婦連〉の比嘉会長からの、怒りにあふれたごあいさつでした。元凶は「基地」です。

次に、開催地・北谷町の野国町長さんから、連帯のごあいさつを頂きます。

本当の平和がほしい

野国昌春（北谷町長） 野国です。怒りを持って、ここにご参集くださった皆さま、大変ごろうさまです。

三〇団体が呼びかけ団体となり、この集会を持たなければならぬ状況が、沖縄の状況です。

私は、この事件の第一報を、二月十一日の十一時頃、もらいました。

二度と起きてはならないことが、また起きたのか。

沖縄市内で連れ去られた。北谷の閑静な住宅街。保育所も隣にある、そういう場所での事件です。

私はその日に、町の幹部を集めて、今後の対応を協議しました。到底許せない事件なので、米軍をはじめ、外務省沖縄事務所、沖縄防衛局などへ抗議をしました。——沖縄市の東門市長と連携を取りながら、翌十二日からの行動を

決めました。

行動の中で怒りを覚えるのは、「このような危険な軍人が民間地域に住んでいること」です。今回の容疑者は、北中城に住んでいる軍人です。北谷には、かなりの外人住宅があり、危険な隣人がたくさんいるわけです。

しかもこの軍人は三八歳。十四歳の娘がいてもおかしくない二等軍曹。「上からも下からも五番目」の地位にあり、部下もいる、指導的立場の軍人です。

「本来ならそこに居てはいけない人」が「居た」わけです。県議会で、十三日には抗議決議をし、関係筋に抗議行動をしました。PTAや老人会、青少年協議会など、各団体も協議しています。

北谷町も、「できるだけ早く怒りの抗議行動をしよう」と決定しました。この怒りは、三連協（嘉手納基地をとりまく北谷・嘉手納・沖縄の三市町連絡協議会）の問題でもありますが、全中部の問題でもあります。

閑静な住宅街が現場でしたから、どこで起きてもおかしくない危険なものである。単に綱紀肅正とか教育プログラムを変えんとかでは解決できない。根本的には「基地を、のけてもらうことだ」と思っています。

北谷は、騒音問題でも声を出しているが、国は、なかなか動いてくれない。沖縄を、「占領意識」で対応しているのではないか。

行政を預かる者として、安全を守ることは最低限の責務です。被害少女を守る、ケアをしつかりする。二次被害、三次被害を出さない。

本土の一部の週刊誌には、「ついて行った少女が悪いように書いてある」と聞いています。こういうことがあっては、なりません。私は「声をかけ、誘ったこと自体に、罪がある」と思っています。この子には、何の責任も、罪も、ありません。私も、町民の安全・安心を感じるような、町づくりをしていきたい。みんなで大きな声をあげていきたい。

司会 三連協、北谷町の町長さんの、実情報告でした。

爆音に悩まされ、人権侵害に悩まされています。何としても中心になっていただきたい北谷町長です。

諸悪の根源である基地を米国に提供しているのは、日本政府であり、駐留しているのは米国軍隊です。日米政府は、いま、どう動いているのか。そういうことも含めて、参議院議員・糸数慶子さんから、連帯のごあいさつを頂戴します。

糸数慶子（参議院議員） 皆さん、こんばんは。悔やしく

て、どうしようもないです。女性・子どもたちが、安心して生きていく状況を否定するような事件が、また起こってしまいました。沖縄戦から六二年。沖縄が本土に復帰して三年という歳月の流れは、県民にとってなんだったか。

今国会では、「教科書問題」で、沖縄の人びとの苦しみ、日本の軍隊の下での強制集団死が問題になり、再び国民を戦争へ導こうとする動きに、県選出の国会議員も、怒りに燃えて行動。「これからは、子どもたちに歴史を正しく教えていこう」とする矢先に、今回の事件が発生しました。

《基地・軍隊を許さない行動する女たちの会》は、米国総領事に抗議しました。しかし、返ってきた返事は、ありきたりの、「遺憾に思う」「綱紀粛正」でした。「生きて体に血が通っているのか」と、疑いたくなる冷淡な対応でした。心から怒りを込めて糾弾したい。

基地ある限り悲劇は起きる

同時に、沖縄にこれだけの海兵隊を置いているのは誰か。事件・事故のたび、私たちが米国に行き、沖縄の被害を

訴えたと、「日本の国が、ゲストとして、米国軍隊を沖縄に置いてあるんだ」と言います。日米安保があり、「思いやり予算」があるから、次から次へ、事件を起こしている。

北谷町長も言われたように、事件が発生すると必ず問われるのは、「被害者がなぜその場所にいたのか」「なぜその時間にいたのか」「なぜついて行ったのか」ということです。

とんでもありません。責められるべきは、過密な状態で駐留する米軍です。三八歳という、物事を判断できる年齢の人です。決して二〇歳前後の海兵隊員ではありません。

総領事は、「この兵士は、これまで事件を起こしていない」と。とんでもない。私たちは、これから何をすればいいか。

結論から言えば、米軍基地の撤去しかありません。

国会では、福田総理をはじめ、高村外務大臣、町村官房長官が、判で押したように、「遺憾に思います」「再発防止に全力を尽くします」と言いますが、これまで幾度聞かされた言葉でしょうか。

事件のたびに、「綱紀粛正」「再発防止」です。

「教育プログラムを見直す」と言いますが、どうすれば、沖縄の文化を大切に、良き隣人として、沖縄の人びとに迷惑をかけないようになるのか……。

世にもふしぎな「プログラム」

プログラムを見て、びっくりです。

かつて、九五年の事件後、「県民に糾弾される海兵隊が肩身の狭い思いをしているだろう」ということで、時の橋本総理の夫人を中心とした学識経験者や、文化人たちが、米兵を本土に招いて、東京の一流ホテルに宿泊させ、箱根の観光旅行をさせたことがありました。

そんなプログラムではなく、由美子ちゃん事件をはじめ、過去に発生した数かずの性暴力の被害を、具体的に示し、「このような人権侵害をしてはいけない」と、真っ先に教えるべきではないか。

形骸化したプログラムではなく、一日も早く基地を撤去させて、「本当に安心して暮らせる沖縄」に、していこうではありませんか。

国会では、来る二日に、超党派で、野党の女性議員に呼びかけて院内集会を開きます。決議には、国連の人権委員会に対し、「沖縄調査をしてほしい」と盛りこんであります。

米国は、大統領選挙候補者選びの真っ最中ですが、小学生から大人まで、みんなで手紙を送る、メールを送る、

——そういう運動もしていきたい。米軍が一日も早く沖縄から去るように、皆さんと共に、闘っていきたい。

自由行動の米兵、束縛されている市民

司会 九五年の怒りの集会、アメリカピースキャラバンを展開した女性たちの行動を、昨日のことのように思い起こしました。

「繰り返しません」と言いながら繰り返している。「基地の整備縮小」「基地負担の軽減」と言いながら強化している。この日米両政府の責任を、徹底的に追求しなければ、いけないと思います。

国会で追及し、やっと基地外住宅の数が明らかになりました。基地外住宅（〇七年九月現在）は、登録、六、〇九八戸、契約は五、一〇七戸、人数は不明だそうです。この人たちには、夜間外出禁止も、適用されません。何の規制もできませんから、野放しです。

米兵は、基地の中にも外にも、自由に出入りできるのに、私たちは、できない。基地の中で何が起きているか、どんな汚染があるか、どんな問題があるか、沖縄の私たちは、

調査する権利は認められていません。それが、「地位協定」です。不平等極まりない恥すべき地位協定です。これを、どうするかの問題もあります。

次は経過報告です。九五年から今日まで、どのように問題が解決されたか、されなかったのか。高里鈴代さんから経過報告を、お願いします。

「やさしすぎる」沖縄の県民たち

高里鈴代（行動する女たちの会） 先ほどから「九五年」という言葉が出ますが、とても、つらいです。

この会場にも、年数や記録にされてない事件で、つらい思いをしている方が、いるかも知れません。

「あの時から」、「あの年から」という言葉を使わなくてもいいような、そういう社会をつくっていくには、どうしたらいいか。改めて思っています。

この舞台には、「安全なところはどこ？ 軍隊の島に安全も安心もない。子どもたちは守られる権利がある。ノーモア・ベイシス、ノーモア・バイオレンス」と、書いてあります。これは、この集会のためにつくったものではない

のです。二〇〇〇年の米国の独立記念日、休みの日に、米兵が中学生の部屋に入りこんだ事件がありました。その抗議の時につくった横断幕なんです。

家の中で休んでいても、そこは安全な場所ではないのか。そして今回、普通の生活の場で、楽しく集ったその場所が、危険な場所に変わっていた。

二〇〇〇年の横断幕がそのまんま使える沖縄の社会は、いったいどうしたら変えられるのか。あるいは変えるために、私たちは何をし、何をすべきでなかったのでしょうか。そういうことを、ふり返ってみたいと思います。

〈行動する女たちの会〉では、「沖縄・米兵による女性への性犯罪」として、戦後から今日まで、記事になったものだけ、とにかく集めて、時系列にまとめて年表にしてみました。九六年にスタートして、今は七版。A4サイズの二五頁になっています。その中に「由美子ちゃん」のように名前を覚えていっているのは、その子が亡くなったからです。その後、一九八〇年頃、ベトナム戦争が終わり、沖縄は本土に復帰し、米兵は徴兵制度から志願制度に変わって、その間も、ずっと、基地は、あった。

フェンスが腐蝕して、金網を下の方から曲げて、そこから、

中・高校生を基地の中に連れ込んでいく——という事態が起きました。教育界も震えました。

そして、今です。ずっと起こりつづけているのです。

「人殺し」を「仕事」として学ぶ米兵

二〇〇五年、やはり米国の独立記念日に、空軍の兵士が、十歳の少女を駐車場に引きずり込む事件が起きました。

その時に、その二〇年前に、自分自身が高校二年の時に三人の米兵に暴力をふるわれ、その後ずっと沈黙してきた人が、「二〇年もたつて、こういうことは許されない」と、県知事に手紙を書いた。その手紙が沖縄地元紙の社会面に載りました。覚えている方もいらつしやると思います。

彼女は、「今でも米兵たちが我がもの顔で私たちの島を、何の制限も受けずに歩いている。仕事として人殺しの術(すべ)を学んでいる米兵たちが歩いている。「沖縄の八割の人が、軍隊の撤退を、望んでいる」という状況にあつて、基地の移設を、しつかりと拒否して、一日も早く、改善をはかってほしい」と、手紙で知事に訴えました。

その彼女は、実は事件として警察に訴えたこともなく、

この年表にも入っていません。年表に入っているのは、活字になったものですが、その背後に、いつたい、どれほど多くの女性・子どもたちが、恐怖を感じ、沈黙をし、そして事件が起こるたび、新たに痛みとして思いおこされているか。なぜ、これほど起こり続けているのか。この、「ちゅら島」(美しい島)と呼ばれている島で！

分析をすれば、当然といえば当然ですよね。日本の中の七五%。駐留軍の七割が沖縄にいる。海兵隊はアメリカの西と東にそれぞれ本部があつて、三番目の本部が沖縄にある。沖縄は、圧倒的多数の軍事基地と、圧倒的な率を占める海兵隊が駐留しています。戦争が終わつて、戻ろうとしたわが家は、金網のはるか向こう、畑も家もお墓も、遠く離れた所になつて、皆は、フェンスにはりつくように生活をしてきた。基地と生活は、金網をへだててつながっていません。そして、地位協定で「地位」というのは、「軍隊の地位」です。入管法では外国人が登録義務があるのですが、米国軍人は、そういうことが、いっさい免除されている。いつ出動するかもしれないから、軍事機密。だから、沖縄に、いま何人、米国の軍人がいるか、知事すら、わからない。自治体の長は、把握を許されていない。そういう存在が、

この六三年間にわたって駐留し続けている。彼らは、観光で来たり研修で来たり、ボランティアで来たりしているのではない。日々、戦いの兵士となるべく訓練をしている組織が、長期にわたって存在しているわけです。

沖縄から、「基地撤去の声」があがると、謝罪や綱紀粛正や、いろいろ出てきますが、いま、特に強調しているのが「良き隣人政策」です。グッド・ネイバース・ポリシーです。

そのポリシーは、総領事館のホームページを見て下さい。その中に「軍人」なんて書いていません。「基地内住民」と書いています。「基地内住民の素顔が十分に知られていない。その能力、人材を、もっと生かされるべきだ」と、ホームページに書いてあります。

また、「老人ホームを訪ね、環境やパラリンピックを」と、その能力を生かすボランティア活動が書いてある。このようにして、地域に受け入れられるような政策をつくる。残念ながら、このプログラムを実施すると、日本政府から補助金が出る。基地内と外の自治体が福祉関係のプログラムをいっしょにすると、補助金が出る。積極的に、隣人政策をとっている。それにもかかわらず、ときどきこのような事件・事故が起こり、みんなの反対の声が一斉にあがる。

「良き隣人」になりすぎている私たち

二〇〇一年の一月、高校生に対するわいせつ行為で、沖縄の怒りが満ち、県議会で求めたのが「海兵隊の撤退」だったんです。「縮小」ではもう遅い。「撤退」を、県議会ですべて決議しました。

採決を受けた時に、米軍は、どうしましたか？

あの時、ヘールストン四軍調査官が、稲嶺知事に面会に来て、体が半分に曲がるくらいに、謝罪をしたんです。「失礼なことを致しました」と。

でも、その裏では、実は「このようなことをさせた知事も、副知事も、議員たちも、他のリーダーたちも、『無能だ』」という、怒りのメールを部下たちに送っていたことが判明したのです。海兵隊撤退を求めた決議に対する怒り。決議を受け入れた県のリーダーたちを「無能」とし、ものすごい卑劣な言葉を使って批判したのです。

相手が「良き隣人政策」をやった結果、私たちは、「とてもいい隣人」になっているのではないのでしょうか。

海兵隊撤退の決議をしたのに、そのまんま、なしくずしになつて、その後の怒りの度合いを計るように、箱ものが

出てきたり、経済的な支援が出て、道路が出来て、交流センターが建つ。隣人政策どころか、私たちこそ「あまりにも良き隣人」になってしまっているのではないか。

私たちが「状況」を許してきたのでは……

米軍基地のゲートの前に、立て看板があります。

「ここは嘉手納基地との境界線です。許可なき者の出入りを禁ずる」——司令官の名が書いてある。でも、この下に、発泡スチロールで、私たちも「立て看」をつくったんです。「ここは沖縄地域との境界線です。許可なき者の出入りを禁ずる。——地域住民の名による」と書いて。

こういう情況が、なしくずしになって、沖縄の二〇%にとどまらず、液化現象のように、行動の自由も含めて、住宅も、基地外地域に流されてきている。私たちは、それをやむを得ないこととして、四二の市町村が、揃って決議文・抗議文を出しても、怒りの度合いを見て何かをやってくる。私たちが、溜飲をさげると、また同じことをくり返す。

本当にこれでいいのか。本当に「被害者は悪くない」と思うならば、そのような状況を許し、生み出し、いつのまにかそれになじんでしまっている私たち自身が、「ある意味で、それを許してしまった」と言えるのではないのでしょうか。

新しく抗議文を書いている、日付けだけ変えれば通用しそうなものが、いっぱいあったと思います。

そして今や少女へのバッシングです。

少女の年齢が低いと、母親の責任が問われる。

家の中に入りこんだら、なぜドアが開いていたかと

……。実に巧妙に出てくるのです。

被害者へのバッシングは、実は、沖縄全体に対する暗黙の非難・批判でもあるのではないか。沖縄は、何でも「反対、反対」と言うけれど、実際は、その結果を受けているのではないか。

四国の知事が言いました。「基地があるから、こんなに国の補助を受けている。交付金もある」と。これは、「被害者に向ける目」と同質だと思います。

私たちは本気になって、「被害者に非はない」、「少女に非はない」と思うなら、そういう被害を生み出す環境をつくらなくように立ち上がりたいと思います。

各地域からの発言

司会 経過報告、もっと聞きたいことが、いっぱいです。

どの報告も、本質をついているからです。でも、時間が限られています。このあと、地域や職場、それぞれの立場からの発言をお願いしたいと思います。

まず地域から、——北谷町砂辺の自治会長さん、松田正二さんをお願いします。

松田正二（砂辺自治会） こんばんは。初めてで、あがっています。わじわじーしています。

怒ってください。自分の子どもだと思って、孫だと思つて、怒ってください。

野獣です。人間じゃない。

目をつぶって考えてみてください。

オリの中にいるのは、私たちなんです。

軍隊は、いつでも自由に出入りできる。

私たちはどうか。

入れますか。

自由に行動できますか。

私たちがオリの中なんです。

それを認識してください。

皆さん、少女を「自分の子ども」だと思ってください。

たまりません。こんなことが許されますか。

基地外住宅は、「基地外基地」ですよ。どんどん広がっています。たたかいましょう。

東門美津子（沖縄市長） 出張の帰りで、遅れてすみませんでした。すでに、多くの方がたが発言なさったでしょう

が、私は二月十一日に事件の第一報を知らされました。五年のあの県民大会で大田知事がおっしゃった言葉「一人の少女の人権を守り得なかったことを行政の責任者として深くおわび致します」を、私は市長として、市民に申し上げます。沖縄市は、翌日から、各機関へ抗議・要請行動をしております。被害少女の人権を、二度きずつける報道は、絶対に許すことはできません。本土紙、一部の週刊誌です。市民の安心・安全を守るという立場で、しっかりと主張すべきは主張していきたい。共に頑張っていきましょう。

司会 九五年の県民大会での大田知事の言葉を思い出し、かみしめているところです。

続いて、教育の現場から、沖縄組中頭支部の女性部長、崎原さんに、お願いします。

軍隊は、町にも村にも、要らない

崎原美佐子（冲教組中頭支部女性部）　こんばんは。度重なる米兵の性暴力は、絶対に許せない。

事件後、授業で、子どもたちと、職場で同僚と、そして、まわりの人たちと、話をしました。

多くの怒りの声と同時に、残念ながら、「なぜ夜遅くまで歩くの」「自分で乗ったんでしょ」という声があります。

その時、私は言います。

「時間帯によって侵されてもいい人権つてあるの？」

「何時までなら被害者に非はなく、何時からなら被害者に非があるの？」

「場所によって蹂躪されてもいい人権」つてあるの？」

「いついかなる時、いかなる場面でも、相手が大人であれ子どもであれ、女性であれ、男性であれ、人として守られるべきものが〈人権〉であつて、それを力でねじ伏せる米兵こそ、絶対に、悪いに決まっているじゃないですか。絶対に許せないではないですか」

「国の偉い方がたがよく言います。『世界の平和のために基地は必要だ』と。『日本の平和のために軍隊は必要』と。

ならば、なぜ、平和を守る兵士のために、私たちの子どもが、こんなひどい目に会わなければならないのか。

この矛盾を、子どもに、どう説明すればいいでしょうか。事件が起こるたびに、「綱紀肅正」と叫ばれますが、「武器を持つて武力で相手を傷ついても平気である」「立派な兵士」を作るプログラムの中で作られている兵士たちです。「綱紀肅正」がどのくらい浸透し、効果をあげられるのでしょうか。

子どもたちに、「人は、人として、いかなる暴力からも守られなければならない。」「子どもたちは守られる権利を有する」と。

このことを、みんなで確認し、さらに抗議の声をあげていきましょう。

司会　私にも一四歳の孫がいます。いま、その子たちと話している気持ちで聞いていました。
「自分の娘だったら、孫だったら、ということ、考えてください」という訴えがありました。

最後に、女性の立場から、〈新婦人の会〉の前田美美子さんの発言をお願いします。

前田美美子(新婦人の会)

聞けば聞くほど、怒りがこみあげてきました。少女に落ち度はありません。一般市民を装って、他人を疑うことを知らない幼い少女を、ウソをついて連れだし、暴力をふるった、あの兵隊にこそ、百%、非があります。

九五年の県民大会で、「軍隊のない、悲劇のない、平和な島を返せ」と、高校生が訴えました。それなのに、再び幼い少女が被害にあったことに、怒りを禁じ得ません。

二度、三度、四度、五度……何度くり返せばすむのか。これが沖縄県民の怒りの声です。

防衛省、外務省へ抗議に行きましたが、「再発防止、綱紀粛正」の中味として、「ウチナーンチュになじむように、米兵に、沖縄の文化や歴史を教えて、沖縄をいつくしむ心を育てています」と言っていました。

沖縄は戦後、銃剣とブルドーザーで土地を取り上げられ、基地がつくられた。そして様ざまな事件・事故があった。そのことに対して、沖縄県民は黙って受け入れたのではありません、そのつど抗議の声をあげ、反対運動をやってきた。このことこそ、米兵に教育すべき、知らせるべきではないか。米国では、「基地の整理縮小」と言い、「凶暴な海兵隊員

を八千人削減する」と言っています。

「この沖縄にいて一万二千人の海兵隊の、八千人がいなくなれば少なくなる」と思ったら、「二万人残る」と言います。計算があいしません。「主力部隊は残る」のです。

ネルソンさんが言いました。

「沖縄で人を殺す訓練をして、ベトナムに行って人を殺した。凶暴さの訓練をする軍隊が、沖縄に駐留している。」と。

子どもたちの人権を守り、私たちの未来を守るためには、基地は、要らない。

母親として、女性として、子や孫たちに二度と再び、こういう悲惨な思いをさせないためには、県民大会を開いて怒りの声を上げ、「基地のない、どこでも安心して子育てのできる沖縄」をつくっていく。

そのために、力を合わせるべきだと思っています。それぞれの地域、団体で、抗議をして、「許さない!」という思いをつきつけて、変えていきましょう。

司会 私は昨年八月、広島での、ある集会に参加しました。そこに招かれたイラクの女医さんが、私に言いました。

「あなたは沖縄から来たそうですね。なぜ米軍を追いつ

してくれないの？」イラクの人から、そう言われました。「いや戦っています」と言ったら、「どう戦っていますか」と、突きつけられました。このことも、皆さんといっしょに考えなくちゃーと思っています。

即興劇「街かどの会話」

さて、次は即興劇です。五、六分の寸劇です。この集会用に作りました。

出演者の中には、顔を見られたくない、アップで写されたら困る、という人もいます。

ですから、マスメディアの方がた、アップで撮らないでください。全体を写すのはいいです。一人ひとりが特定できるような写し方はしないでください。

フロアからの発言も、ここへ来て勇気を出して、「よし、発言しよう」と決意をしている方もあろうかと思えます。それも、遠くからならいい。アップは、しないでください。

では、即興劇「街かどの会話」をどうぞ。



即興劇「街かどの会話」で問題提起する若者たち

夜は八時頃。事件後、一週間後、宮城商店の前です。

男 「新聞でも見てみようかね」

あつせ、また！ アメリカたちよ。

女 「でーじな事やしがよー、やしがよー、

高校生の服装よー。夜あつちゅしよー、

あれーいっぺー心配やんやー。」

女 「友子さん、暗くなっているのに、あんたどこ行くの？

へー、塾？ 大丈夫？」

男 「スカート短いネー、気をつけないとねー。」

女 「お家にカギかかってないから泥棒してもいい」とい

うことは、ないでしょう？ それと同じで、軍隊が沖
縄にいる。

——それが問題なんですよ。

男 「やしがよ、基地から銭もらっている人がいるさー。」

女 「防犯カメラと言ったって、沖縄には基地がこんなに

たくさんあるのに、いくらカメラをつければいいの？」

女 「カメラとか基地のこと、よくわからないけど、被害
者のこと考えたら胸が痛くてねー。」

高校生 「塾にも行きたいし、おしゃれだつてしたい。私
たちはどうしたらいいですか？」

(要約です)



司会 「私たちは、どうしたらいいんですか？」という少

女の問いかけで終わりました。いくつかの問題提起があったと思います。それも含めて、フロアから発言を頂きます。

二〇名の予定でしたが、時間の関係で一五名になります。

一分間スピーチの希望者は、左右のマイクの前に並んで下さい。発言の際は、名前を言いたい人は言ってください。言いたくない人は、言わないでいいです。ただし、タイムキーパーがいますので、「時間厳守」です。

これは本土の人たちが起こした事件です

知念ウシです。 私たちはマイノリティーです。どんなに

私たちが反対しても、本土の圧倒的な国民が「基地がほしい」と言っていますから、なくならないです。本土の友だちに勇気を出して、「これ、あなたたちの問題よ、これ、あなたたちが起こしたのよ、責任とりましょう」と言いましょう。ブログを見て下さい、すごいバッシングです。これが、ヤマトンチューがやることなんです。

「友だちだから言にくい」ではなく、「友だちだから、ちゃんと言いましょう。」

米兵にも言いましょう。

私、ピラをつくってききました。英語と日本語で。

コピーして配って下さい。

悲劇の原因をつくっている人たちがほど、被害者を非難する

新基地がつくられようとしている名護市から、来ました。辺野古でも、綱紀肅正と言われているなかで、事件が起きました。

名護市長は、基地を受け入れた口で、「遺憾だ」と言いました。

学校現場には「子どもたちの安全指導を徹底しろ」との通知が来ています。週刊誌には、少女の問題が、こと細かに書かれています。許せません。

皆さんの力で、新しい基地を作らせない。今ある基地も撤去させましょう。

北谷町の源河です。

湾岸戦争の時、沖縄に駐留していた元海兵隊のアレン・

ネルソンさんが言いました。「イラク国民を人間と思うな。」と教育された。」と。

米軍の兵士教育からすると、沖縄県民を人間として扱っているのか、疑問です。「綱紀肅正」、「再発防止」という、日米政府のギマン性を、はつきりさせましょう。昨年の九月二九日の闘いにつづいて、県民大会を開いていきましょう。

北谷町民五年目の退職教員です。

北谷町民として、先ほどの砂辺区長の話を聞いて、同じ町民として非常に心が痛いです。安保条約に基づく基地がある限り、このいまわしい少女暴行事件、基地被害、騒音など、決してなくなりません。このような集会を数多くもって、心を一つにして、みんなで闘うことが大切です。

私も退職教師です。

きょう、抗議と記者会見をしてきました。「国のために命を捧げる教育への動き」を止めるべく、活動しています。いっしょにがんばりましょう。

社民党の県会議員・狩俣信子です。

こういう事件が起こるたびに、在日米大使館など、いろいろな所に要請しますが、一向に効き目がありません。

綱紀肅正、兵員教育……、これ以上、聞きたくないです。言ったって意味がない。

直ちに海兵隊を撤退する。

これが私たちの要求です。

この怒りを、どこにぶつけたらいいか。

米軍は、いつも「綱紀肅正」「兵士の再教育」を言います。

アフガンやイラクで戦争して、そこに送り出す兵士に「再教育」と言ったって、何の意味もありません。米国は戦争をやめ、沖縄の基地を撤去する以外、ないのです。

監視カメラのことですが、何の意味もない。むしろ、基地に反対する人を監視しています。

那覇市会議員・多和田栄子です。

那覇市議会では、四二市町村に先がけて、海兵隊に対する抗議決議を採択しました。私は宜野湾市出身で、生まれた時から目の前にフェンスがあり、それが当たり前という状況の中で成長してきました、あのフェンスを取っ払い、基地をなくすことに、私もがんばってまいります。

うるま市の和田です。

事件後、職場で、女性同僚と、この話をしたら、「この子は結婚できないね」という言葉が返ってきて、とてもショックでした。少女こそ、誇りをもつて、沖縄で堂々と生きていけるような環境を作っていかなければいけない、と思います。

本土マスコミも、トップで報道しました。教科書問題で集まった県民の威力、民衆の力を見せるべく、二〇万人の県民大会を実現しましょう。

沖縄組の組合員で、小学校の教師です。

去年の教科書問題に続き、こんどは暴行事件。私たちの目の前で、いつ教え子がこういう目にあわされるかも知れません。子どもたちの危険を肌で感じます。素直でやさしい子どもたちが犯される……。

沖縄市の仲村未央です。

一人の少女の人権が守れなくて、何が「日米安保」でしょう。か。「人間の尊厳を犯してまで守るべき日米同盟」というのが成り立つでしょうか。

沖縄市では、昨年、強姦事件があり、年明け早々、タクシードライバー、一か月もたないうちに今回の暴行事件です。これこそが、米軍の綱紀がいかに乱れているかを立証しています。これを容認している日本政府の態度を、きびしく追求し、声をあげていきましょう。

日本共産党・県会議員の外間です。

怒り心頭です。マスコミの報道、さらにこの集会での、皆さん方の話を聞き、対症療法ではこの問題は解決しないと痛感しました。何としても、基地を撤去させるべきです。県民大会を成功させるためにも、がんばりましょう。

(女性) 私は写さないで下さい。

勇気をもって発言します。実は私、米軍人の基地外住宅二〜三軒でアルバイトをしています。今日は、地図を持って調べに廻っていました。

退職教師の伊波です (男性)。

かけがえのない子どもたちの尊厳を破壊され、怒り心頭です。今日、外務省沖縄事務所に抗議に行きました。

政府の県民を愚弄した態度に、はげしく抗議しました。県民への謝罪が、いつさいありません。

根本的解決は、基地撤去以外には、ない。

政府も知事も、基地撤去に言及されるのを恐れている。

(男性) にじてにじららん(がまんできない) アメリカのしわざ……。

私たちの先人は、近隣諸国との貿易で、武器を持たずに国を運営しておりました。

憲法の精神に反するこの基地は、絶対、許してはなりません。基地を提供しての振興策のお金は、私たちは拒否しなければなりません。

(男性) 私、ヤマトンチューです。沖縄に基地を押しつけている主権者の一人として、どうしても基地建設を止めなければならぬと思って、沖縄にきました。毎日、海に出ています。

皆さんにお願いです。ここにお集まりの大勢の方が毎日辺野古に居れば、必ず基地建設、止まります。足しげく辺野古に来て下さい。

社大党・県議会議員の比嘉京子です。

「子どもの権利条約34条——子どもを性暴力から守ることとは大人の役割」です。守れなかった私たちが、問われています。

「国が守れなかった責任」を、とらせるべきです。

「日本国がアメリカにどう思われているか」の鏡です。

県民は「日本国にとってどういう県民なのか」を、しっかり問うていきましょう。

(女性) 北海道から来ました。私は違った意味で、たいへん怒りを覚えています。

家族に障がい者がいて、大好きな沖縄を離れなければならないくて、北海道に移住して四年目です。

大自然のすばらしい所に住んでいますが、逆に怒りがこみ上げてきます。

この自然と環境が守られているのも、沖縄に、これだけたくさん米軍基地があり、沖縄県民が、いつさいを荷っているからです。北海道の方がたにも、これを伝えたい。

沖縄の情報は、あまりにも伝わっていません。平和ボケです。集会を、沖縄だけでなく、各県でも、やってもらいたい。

司会　いかがでしたか。一分間発言——。(大きな拍手)

長いメッセージが、衆議院議員・照屋寛徳さんから届いています。はしょって、一部だけ紹介します。

「ワジワジしている。もはや米兵は(良き隣人)ではなく、(悪しき隣人)です。基地あるがゆえ、軍隊が駐留するがゆえの、不条理な犯罪に、うちな—うないの怒りをもつて、共に声を上げ、闘い続けましょう」

司会　先ほど会場の皆さんからいただきましたカンパは、六万六、二八二円、参加者は三三〇名です。ご報告します。
では、集会アピールの提起を、北谷町議員の、玉那覇さんからお願いします。

玉那覇秀子(北谷町)　アピール文を読み上げる。

(アピール文は「あごら」316号67ページに掲載)

司会　アピールなので、あて先を記述していません。さっそく行動を起こしたいので、あて先を次のようにしたいと思いますので、口頭ですが、提案します。

あて先は、内閣総理大臣、防衛大臣、在日米国大使館、在沖米国総領事、県知事、四軍調整官、以上六者です。

賛同の方は、万雷の拍手をお願いします。

(万雷の拍手、会場にあふれる)

ありがとうございます。

「閉会のあいさつは司会で」ということですが、みんなでシュプレヒコールをしたいと思います。立ち上がってやりましょう。

「暴力はゆるさないぞ」「基地は、いらぬ」「海兵隊は出ていけ」の三本を二回やりましょう。腹の底から、声をだしましょう。

「性暴力は、ゆるさないぞ」

「基地は、いらぬ」

「海兵隊は、出ていけ」

(会場を揺るがす力強い声)

ありがとうございます。

これで緊急抗議集会を閉会いたします。

発告被害女性ぬえ絶

安全な暮らしいつ「危険な隣人」恐怖

米兵暴行・緊急女性集会

【北谷】米兵による暴行事件を受け、女性たちが緊急なる婦人被害への憤りと無念をぶつけた。十九日、北谷町のやんたん三ツライセンターで開かれた「危険な隣人はいるかい」緊急女性集会。「いつになったら安心して暮らせるのか」「基地の存在を許してきた私たち大人も問われている」。女性たちは代わる代わるマイクを握り、せきを切ったように基地撤去を訴えた。

(一面参照)



基地被害を訴える声(真を偽る参加者。十九日午後、北谷町・やんたん三ツライセンター)

参加者ら基地撤去訴え

会場は約百三十人が詰め掛け、立ち見が出るほど。九割ほどが女性で、増上りの話身じろぎもせすに聞かされた。「安全な暮らしを」と、過去の米兵による性犯罪事件に抗議するため作られた横断幕を舞台正面に再び掲げ、繰り返される被害の歴史を告発した。基地・軍隊を許さない行動する女性たちの会の高里錦代共同代表は、「横断幕が今までのま使えようならこの沖縄社会を、とうしたら変えられるか」と問い掛けた。

沖縄大一年の安慶名さつきさんは「同じ女性としてほっておけない」と、母つるさん(六八)と参加。「自宅が警備署宅と近く、前を通るのも怖い」と表情を曇らせる。つるさんは「みんなでこれは勇気だと声を上げた」と強調した。昨年末、約四十年住んだ東京から帰郷した土地博子さん(五三)。十三年前の県民大会は、東京で報道を見ても「身近に感じられなかった」というが、帰郷直後に続発する事件に「今回は居ても立

てもいられなかった」と、深刻な表情を浮かべた。

北谷町の島崎孝一さん「同じの女性」とは「沖繩は基地の中にあるように連立つて来た。『米兵』なもの。日本政府は抜本的な解決を示してほしい」と、切迫した様子をなくす以外に方法はないと語った。

(二月二〇日、沖縄タイムス)

頻発する米軍凶悪事件、女性への性暴力を許すな

「米軍犯罪集団！辺野古新基地建設反対！アセス調査強行実施を許さない市民集会」における基調報告

高里 鈴代

二月十日、またしても少女に対する性暴力事件が発生。加害米兵は、沖縄県警が身柄を拘束していましたが、被害者は、「そっとしておいてほしい」の談話を残して、事件として訴えることを取り下げました。なぜ取り下げたのか。

日本の法律では、殺人、強盗、放火、強かんの、四つの凶悪犯罪のうち、殺人・強盗・放火の三つは、事件が起き、容疑者が逮捕されると、すぐ起訴されるわけです。ところが、性暴力・強かん事件は、「親告罪」で、本人に起訴する意思があるかどうかを確かめて、はじめて検察官は起訴をします。ですから、これまでも、実際に起こった犯罪が、裁判にならずに事前に取り下げられたことは、かなりあります。今回も、その一つです。

ふり返ってみると、一九九三年、基地の中に車で連れ込まれ、強姦された事件が発生していますが、起訴直前になって、容疑者がゲートをくぐりぬけて、民間機でアメリカ本国に逃げ帰ったことがあります。実は、その前に、強盗事件で容疑者が米国に逃げ帰るということがあったので、このような事件が頻発していることに対して、当時は、県民や各議会が、大きな問題として声をあげていました。そこで米軍は、国際刑事機構にも連絡をし、世界中に手配をして、容疑者を捜したわけです。

加害者は、自分の地元のメンフィスという所で交通事故を起こして見つかり、四か月後に沖繩に連れ戻されたのです。しかし、いざ裁判になるのかと思っていたら、被害者が告訴を取り下げてしまいました。ですからこれも、事件として法廷に出されることは、ありませんでした。

そのあと、九五年の事件の直前にも、傷害と強姦が一緒に起こった事件がありました。

この時も被害者は二人ですが、二人とも告訴を取り下げています。

また基地の中で実際に被害にあった別の女性は、いったん沖縄署に訴えたのですが、騒ぎが大きくなって、自分のプライバシーが守られるのか、とても不安を感じて、二日後に取り下げてしまい、この事件は、基地内での軍法会議だけになりました。

これは九五年の直後だったものですから、加害者は、禁固十五年という、日本の法律に比べて、とても重い刑になりました。しかし、その前の九三年の事件は、レイプ事件にはならず、逃亡罪に問われて、ランクが下の「軍追放」という刑になったわけです。

告訴取り下げの背景

レイプ、性暴力に関する事件というのは、「日本の法律では親告罪である」という性格から、「自身自身の安全、安心が、非常に脅かされる」という思いになって、罪を告発するということには、なりにくい。ですから告訴を取り下げる例は、これまでもたくさんありました。

少女と家族が、自分たちの身辺やあるいは生活の中で、「(間違ったこと)を、(間違っている)と言うことによって、罪を裁いてほしいという思い」には、至らなかったからだと思います。これまでもそ



うだったし、今回も、改めて、そのことを強く感じます。

今回の事件のあと、私の事務所にも、何件か電話があつて、「被害者は告訴を取り下げたんだ。だから犯罪はなかったんだ。あなた方は事件を理由にして「基地撤去」を言うけれども、あなた方は、なぜ軍事に関わる犯罪だけを問題にするのか。これからは、〈沖縄人のひどい男を追放する大会〉でもやったら、どうか」などと言ってきました。さらに、とても非難がましく、「米兵は悪くはないのだ。少女は未成年には見えなかったというではないか」などと、「犯人の言い分を信用して、私たちを非難するような電話」も、かなりありました。

被害者が声をあげやすい環境を

このような犯罪に対して、私たちが、なぜ声をあげているのか。一つには、このような卑劣な犯罪が沖縄で起こり続けているということ、私たちが実感として知っているからです。

それが、事件として明かるみに出たことで、みんなが「声をあげる機会だ！」と感じたからこそ、今回も、大きな声になったと思うんです。

どれほど多くの者が、沈黙を強いられているか。声をあげられないでいるか。それを私たちは、戦後沖縄に生きていて、知っているからこそ、「しっかりと声をあげていこう」という行為を起こした、と思うんです。

「基地内住民」？ 基地は「経済効果」？

軍隊が起す犯罪が、なぜ問題なのか。——領事館のホームページを見ましたら、不思議なことに、米軍の駐留によって、沖縄の経済が、いかに促進されているか、「県民一人当たり年間三千ドル、年間三億ドルのお金が経済効果としてもたらされている」ということを書いています。しかも、米軍の存在を、「基地内住民」と表現しているんですね。その基地の中の住民・人材・資源を、もつと活用すべきだ」とまで書いています。さらに、「現に英語教師や環境問題、孤児院や老人ホームなどでボランティア活動をしているが、それは、必ずしも十分に評価されていない」などと書いてある。しかも、「起こっている米兵の犯罪は、必ずしも多くはない。一つ事件が起こると、沖縄中が声をそろえて反対をする。現実には米兵が起している犯罪は、沖縄県民が起している犯罪に比べても少ないのだ。まして過去何年間は、減少しつづけている」……などと、強調して書いているわけです。

その中で見えるのは、基地の経済効果の強調です。駐留する軍人を私人化し、「基地の中に住んでいる住民である。その人たちが持っている能力を、もつと活用すべきであって、反対したり抵抗したりするのではなく、むしろ大いに利用して下さい」と言っているんです。「言われている犯罪は大げさで、実際は少ないんだ」とまで書いている。そして県民の犯罪と比較している。まさに言語道断です。

しかし、面会をする、メデア総領事は、「一件でも多すぎる。決して起こってはならない」と、言うんですよ。「決して起こってはならないことが今回起こってしまった」と言う。ところが、「多い、多い、とみんな大騒ぎするが、実際には少ないんだ。たいした数ではないではないか。比較してみろ。地元の人が起こしている犯罪のほうが多いではないか。なのに、小さなことにいちいち目くじらを立

てるのか」というのが、彼の本音です。ならば、どうして大統領が謝罪したり、ライスさんが来て、遺憾の意を表したり、謝罪文をもって来たりするのか、というのが、私たちの考えです。

本気で謝罪するというのであれば、少なくとも実際に軍隊の数を減らすなり、基地外に兵隊を出さないなり、具体的な策があるべきです。遺憾の意を表したり、謝罪文をもって来たりすることは、被害にあった者に対する心からの謝罪ではなく、むしろ「現状をいかに維持していくか」というための、一つのパフォーマンスにすぎない。「表向きの謝罪とは裏腹に、実際には犯罪は少ないんだ、ということ強調する」というのが実態なのです。「今の体制を守っていくためには、一定の暴力や犯罪は、やむを得ない。全体のためにはやむを得ない犠牲である」ということです。

これは、「日本全体の中の沖縄の位置のようなもの」です。ですから少女が受けた被害というものは、「沖縄の状況」と重なるわけです。今回の事件のあと、報道関係などでは「被害者への配慮を大事にするならば、県民大会など、大きなことはしないほうが良いのではないか」という意見も、出ているようです。いったい、「被害者への配慮」とは、何なのでしょう。か。「もうこれ以上、起こさない」という決意は、どうしたらできるのでしょうか。

実は、九五年に県民大会が開かれた時に、十年前に自分自身が三人の米兵から暴行を受けて沈黙を続け、警察に訴えることもできず、父親に相談することもできずに、自分で抱え込んで県外に飛び出し、また戻ってきた女性が、あの県民大会の会場に来たのです。そして、「会場に入ったとき、ほんとにうれしかった」と言ったのです。「自分は訴えることもできなかった。そして、いつのまにか自分を責めていた」と。

彼女は、三人の米兵に道を聞かれたのです。そして、近づいてきた三人の米兵に、いきなり羽交い

じめにされたわけです。それなのに、彼女は自分を責め続けていました。その彼女が、あの県民大会に一人で参加をしたときに、「あ、私は悪くなかったんだ、こんなにたくさんの沖繩の人たちが声を出して怒っているんだ」と実感し、「自分が救われ、また、勇気づけられた」と話してくれました。彼女はその後、基地をなくすために行動しています。

沈黙は現状容認につながる

ほんとうに「被害者に配慮する」というのであれば、「現実に被害にあった人たちのプライバシーがほんとうに守られ、いざという時に心配をしないで訴えることができる環境」をつくっていくことが、まず第一義であって、「沈黙をすること」では、ないのです。沖繩じゅうが沈黙して、あたかも何も起こらなかったかのようにすることは、被害者に対して、「あれはたいしたことではなかったんだ」というメッセージにしかならないのです。

「これは決して許されないことなんだよ。でもあなたが訴えられない気持ちには、よくわかる。そっとしてほしいという気持ちも、そのとおりだ」と、しっかりと受けとめて、〈そっとしておける環境〉をつくりながらも、「犯人は決して許さない」という声をあげるべきだと思います。

私は過去の事例の裁判を傍聴してきましたが、実は、これまでに起こった事例でも、こういう発言があるんですね。三人組の加害者が、「日本の女性には、銃もナイフも持っていない。反撃することは出来ないから大丈夫だ」「日本では、強姦されても大体は訴えない。現に自分の同僚も実際にやったんだが、つかまっていない。だから大丈夫だ」「自分たちはみんな似たように見えるらしいから、面通し

されても大丈夫だ」と言いながら、役割分担をして犯行に及んだというケースがあります。

被害者の落ち度ではない！

過去六〇年余の事件を見ると、銃やナイフをつきつけられ、あるいは集団で襲われるというケースがたくさんあったし、今でも、同様なことが起こっている。そして、被害者はみんな、「殺されるんじゃないか」という恐怖を感じています。実際に相手がナイフを持っていなくても、ほんとに殺されるのではないかとこの恐怖を感じる。すると声も出ない。体も動かせないんですね。沖縄市のデスコで起こった未遂事件の例ですが、「ほんとに抵抗したのか。逃げようとしたのか。あまり服装の乱れがなかったというではないか」という話がありました。

では、舌をかみ切るほど抵抗したら認めてくれるのか。抵抗しないと逃げたことにはならないのか。ついて行つた。あるいは話を聞いた。道を聞かれたので教えた。——そういった行為が、被害者の落ち度であるかのように認識され、それが「被害にあつても仕方がない」かのような話に、仕立て上げられていく。そしていつのまにか、加害者の暴力に対しては、どんどん目減りさせていくわけです。二〇〇一年に起きた事件では、特殊部隊の兵士である犯人に、三年の求刑が出ましたが、判決は一年八か月でした。理由は、「兵士はボランティア活動をしている」というんです。「勤務態度も良い」と上官が証言をしました。こういう軽い判決であるから、日本で犯罪を犯すと、（やり得）になるわけです。

一方、沖縄からフィリピンに行った四人の米兵が、そこでレイプ事件を起こし、一人が有罪になりましたが、「二〇年ないし四〇年の刑」を言い渡されました。いま控訴中ですが、そのとき、米軍側は

「被害者に対し、必死になって、「アメリカにこないか」と説得し、母親には、「いつでも娘に会えるはずをあげますよ」という形で、事件の取り下げを働きかけています。そういうことは、沖縄でも、なされていると思われます。」

継続して徹底した追求を

そういうことを考えると、今回、私たちがしなければならないことは、たとえば「地位協定の改訂」——「不平等な点を、徹底して改訂すること」です。

防犯カメラとか、合同パトロールなど、いろいろ言われていますが、そんな小手先のことでなく、ほんとに改善するというなら、「具体的に、確実に、軍隊に徹底させていくこと」が、「謝罪と共にまずやるべき改善策」であると思うわけです。

同時に、「日本の法律の改定」も含めて、「誰でもすぐ訴えられる環境をつくっていく」ということも大事です。しかし残念ながら、訴え、声をあげても、その結果を、私たちは確認していないのではないか、と思うんですね。

九五年から、「いったい何が約束され」「それがどうなったのか」ということも確認できないままに、また新たに同様な事件が繰り返されている。ですから「問題点を継続して徹底的に追及していくこと」が、私たちの大きな課題だと思います。

「被害者への配慮」というのは、「沈黙ではなくて、現状を変えていく私たちの声」であるし、「行動」だと思っています。

(基地・軍隊を許さない行動する女たちの会・共同代表)

東門美津子・沖縄市長に聞く

少女の安全を守りたい——本土も応分の基地負担を

きき手 桑江 テル子

少女に対する暴力事件が、また発生し、県民に怒りが満ち満ちています。市長は、その第一報を聞いて、どうお思いになりましたか。

二月十一日の朝、八時二〇分、NHKの朝のドラマをみていると、副市長から第一報が入りました。「これから警察に行つて話を聞きたい。市長は待機しててください」という知らせでした。

内容をきくと、一四歳の少女が、わが沖縄市、ミュージックタウン前の路上から、オートバイで連れ出され、北谷の公園で、車内で暴行された、ということでした。

まっ先に思い出したのが一九九五年の少女の事件でした。あの時は一二歳の女の子。こんどは一四歳。あの時の県民大会での、「二度と、こういうことは許せない」「軍隊は、いらない」「軍隊といっしょの生活はゴメンだ」という高校生の発言を思い出しました。「基地があるが故に、軍隊が駐留するが故に、少女の人権、尊厳を守ることができない為政者は、どう謝つていいのかわからない」という思いでした。

これは、九五年の県民大会の時に、当時の大田・県知事がおっしゃった言葉です。行政を預かる者として少女の人権を守ることができないことを本当におわびしたい気持ちでした。これから夢を持ち、未来に向かって、大きく羽ばたいていく少女が、心ない最悪の行為によつて未来が奪われてしまった。怒りだけでなく、つらい・やるせない・むなしい……、どう表現したらいいかわからないけれど、自分の身にあてはめ、「自分の娘だったら、近くの子だったら、本当にどう対応するんだろう。」と思う、つらかったです。

次の連絡を待っていられずに、私もすぐ沖縄署に行き、内容を聞きました。

一番大事にしたかったのは、この子を、もうこれ以上傷つけないこと。第二次、第三次の被害が起こらないようにしたい、と。だから、私は特に詳細は聞きませんでした。学校の特定もしませんでした。ただ、この子の今後のケアを考えていきたいと思ったんです。

沖縄署を一步表に出ると、メディアの皆さんが待ち受けていましたので、私の怒り、悲しみをぶつつけたあとで、「ぜひお願いしたい。皆さんは、報道の責任はありますが、この子を、これ以上傷つけることは、しないでください」と、お願いしました。



「事件の怖さ、犯罪そのものは、ぜひ報道してほしいけれどもこの子のプライバシーにふれることは、慎んでほしい」と、九五年のあの事件から、私たちは学んだのですからね。

二度と起こしてほしくない事件が起きてしまったわけです。

せめて、被害少女を中傷したり、カメラやマイクをつきつける、プライバシー侵害だけは、やめてほしかったのです。

ほんとうにそうですね。その後、市長として、沖縄市として、どのような対応をなさいましたか。

各方面へ、抗議と要請

私がその子に近づくことはしませんでした、中学生とわかりましたので、教育長にも来てもらって、副市長を交えて対応を協議しました。

まず、抗議の行動をしました。その日は公休日でしたので、翌日に、四軍調整官事務所、G5外交政策部、米国総領事、沖縄防衛局、外務省沖縄事務所に、抗議・要請を行いました。

どちらに対しても、「①少女への謝罪と適切な補償 ②具体的な再発防止の公表」を、強くお願いしました。そして、「③日米地位協定の抜本の見直し ④海兵隊の削減」を要望しました。

「グアムでは、海兵隊の受け入れが着々と進んでいるのを、昨年見て来ました。一日も早く、実現してほしい。」と申し入れました。

教育委員会では、各学校に対応をお願いしました。

「学校での対応」とは、具体的にはどんなことですか。

まず学校長会を開き、「事件を知ってもらい、子どもたちを保護するための安全策を徹底してほしい。」と、申し合わせをしてもらいました。

関係筋への抗議と要請の手こたえは、いかがでしたか。

今回の事件に関しては、どこも重く受け止めていました、事件によっては軽くあしらわれることもあります。米軍も「本当に申しわけない」「再発防止のため、綱紀肅正を徹底します」ということでした。

いたいけな少女に対する暴力への怒りを、それぞれのことばから感じました。

日米地位協定の抜本の見直しを

私たちも、女性として、母親として、言葉を絶する怒りを覚えました。事件から約一か月たち、その間にも、また事件が発生していますが、今、米軍に対して何を要求したいですか。


沖縄市に限って言うと、米軍がらみは、実はこの事件だけではないのです。昨年十月に、強姦致傷事件が、年明け一月七日にはタクシー強盗致傷事件が、起こったんですよ。二月十日のこの事件のあとも、「飲酒運転で逮捕」という事件があり、名護市でも「住居不法侵入」が起こったんです。「再発防止」「綱紀肅正」と言っている最中に、さらに沖縄市で、「外国人女性への性暴力事件」でしょう。

本当に頻発している状況が、メディアを通して、沖縄市がどんな街として発信されるか。決して、安心・安全のまちではないんですよ。

沈滞から起き上がるために建設した音市場・ミュージック・タウンで、市民が「よしがんばろう」という矢先のできごとでしょう。安心安全を壊すようなできごとに対して、市長としては、「とても許せない」という思いが強いんです。

米軍と日本政府に対して、「二度と起こさせるな」と言いたい。しかし、口先、お題目だけでは、どうしようもない。根本的な解決策が必要です。

これまでも私は、「日米地位協定の改定をすべきだ」と、主張してきました。「地位協定の抜本の見直し」は、避けて通れないと思います。日本政府はずっと「運用の改善でこと足りる」と言ってきました。「他の国より、はるかにいい」とも言っていますが、決して良くないんです。今度こそ、アメリカに対して、国として強く言ってほしい。



活版屋の街
ニューヨーク

二点目は、海兵隊の早期削減です。

二月一九日に「危険な隣人は、いない」女性集会を開きました。その中でも、参加者が口ぐちに発言していた要求は、それでした。本当の再発防止は、「基地をなくすことと、海兵隊の撤退」でした。国が約束している



街の活性化をめざしてオープンしたばかりの、ミュージックタウン。少女は、ここから連れ去られた。

「海兵隊の削減を、すぐにでも実施してほしい」ということでした。

「地位協定の不平等」の指摘もありましたが、市長は、特に地位協定の、どの部分の改訂を要求しおられますか。

今回の少女事件の場合は、基地外で起きたので、身柄は、すぐ日本側が拘束しました。私は今回に限らず、やはり兵士の意識の中に、「自分たちは地位協定で身分が守られている」という安心感があるのではないか、と思つています。占領意識、特権意識があるのではないかと、よく言われますが、まさにそれではないでしょうか。「日本に居れば日本の法律が適用されるのだ」ということを自覚させるようにしなければなりません。「兵士は守られる。何をしてもいい」のような形では、いけません。日頃から、米国の軍人でも、日本の法律で裁かれるようにしていかなくてはならないと思います。地位協定の根本の問題なんです。

今回出てきた「基地外居住」の件では、どうですか。対応策はありますか。

沖縄市は、北谷町に次いで二番目に多いんですね。全国で一番多いのが横須賀市。次が、北谷町。沖縄市は全国で第三位！ はじめて知らされた数字に驚きました。まだ所属部隊などはわかりませんので、これからワーキング・チームに求めていきたいと考えています。

隣人がどういう隣人なのか、知るべきだと思うのです。「良き隣人政策だ」というのなら。常に「加害者はあちらで、被害者はこちら」という構図では、「良き隣人」には、なれないわけですからネ。お互いに、「知ること」が大切です。

良い人も、いると思うんです。

基地外居住の軍人・軍属の所在、所属を、はっきりさせれば、対応策も、とれると思うんです。地位協定によって、「住民登録なく、市民税もなし」ですからね。日ごろは、「良い人」かも知れないが、ある日、突然、今回のようなことを犯すことだってあるわけです。

全国民で応分の負担を

先の集会での発言の中で、領事館に抗議に行ったとき、「この軍曹は、六年間沖縄に駐留しているが、一度も事件をおこしていません」と、容疑者をかばっていた、と、怒りの声がありました。

最後に、本当の再発防止には、どうすればいいのか。市長ならどうしますか。

むずかしい質問ですネ。答えは出せないでしょうね。ただ、基地あるがゆえの事件ですから「基地撤去」が必要だと、私は思います。しかし、現実問題として、六〇年以上も、私たち沖縄には基地があり、政府は、沖縄の人びとをなだめる政策をとってきただけで、根本的に事件・事故をなくす政策をとって来ませんでした。実際に、基地からの収入で生活している人たちの現状を無視することはできません。そういうことも直視し、基地があることは、第一義的には国の責任ですから、沖縄県民は、国に対して常にあきらめずに、何度でも強く要求していくべきだと思います。

もし国がアメリカにモノを言わないのであれば、私たちは別のことを要求します。

それは、「応分の負担」です。応分の負担なら、国内問題で解決するでしょう。

「アメリカに持っていけ、なくしてください」ではなく、「移してください」ということですからね。沖縄の人びとが「本土の沖縄化はイヤだ」との意見も、わからないではない。でも、私は、五年間の議員活動を通して、「そういうことは言っておれない」と思いました。

国会議員は関心ないでもん。沖縄の基地の問題に。それならば、「全国で応分の負担をしてください。全国民で日本の安全保障を考えましょう、みんなで肩にかついでください、背負ってください。」と、言いたい。沖縄の県民だけに、ずっと背負わせているのは、本当に不公平・不平等である、と、私は常に言っていきたいと思います。

海兵隊削減については、どうですか。

米軍再編計画の中で、グアム移転は決まっていますから、「実動部隊を移してください」と要求しているんです。宜野湾の伊波市長は、「普天間の部隊はグアムに行くんだから、辺野古新基地は、いらない」とおっしゃっているんです。そのことにも、県民は耳を傾け、目を向けるべきだと思います。

普天間の海兵隊はグアムに行くことになっているのならば、それをしっかり進めてほしい。新たな基地の建設は、絶対反対ですからね。

「実動部隊は沖縄に残る」という情報もあるやに聞いていますが、よくわかりませんので、これは、チェックする必要があります。私は、海兵隊の削減が、事件・事故を減らすには重要だ、と思います。

どうもありがとうございます。ますます よいお仕事を！

矮小化される少女暴行事件

——米軍犯罪の根絶は、基地撤去しかない—— 糸数 慶子

国土のわずか〇・六%の面積に、米軍専用施設の七五%ちかくが集中し、在日米軍の軍人・軍属・家族九万二、四九一人のうち、およそ半分の、四万五、四〇三人がいる沖縄。その沖縄で、絶え間なく「米軍人・軍属・その家族等による事件・事故」が発生する。日常的な基地問題Ⅱ沖縄問題として矮小化されるのか。それとも、事件・事故の根源的な原因を探り、解決を図ろうとするのか。

それは、今回の事件を含め、ほとんどが前者と言える。なぜだろう。

今年二月一〇日、沖縄県北谷町で、在沖米海兵隊員による女子中学生暴行事件が起きた。被疑者の米兵は、民間地域に居住。沖縄県警が直ちに身柄を確保、強姦容疑で取り調べをはじめた。

この事件に素早い対応をみせたのは、日米両政府である。日米の「事件に関係する機関」が、直ぐに「遺憾の意」を表明、または謝罪した。福田首相とライス國務長官の会談でも、米軍の綱紀肅正と再発防止が話し合われた。これほどの緊急な対応は、明らかにこの事件を各方面に波及させず、基地問題Ⅱ沖縄問題として矮小化させ、封じ込めようとする日米両政府の意図が読み取れる。歴史教科書の検定意見撤回を求める県民大会の怒りも冷めやらないなかでの不祥事に、あらゆる手を打ったと言える。その日米両政府の意図するように、事が進み、少女の「そつとしてほしい」という告訴の取り下げによって被疑者が釈放された現時点では、確実に矮小化の一途をたどっていると思われる。

この事件で、日米両政府が一番恐れたのは、日米同盟の維持と強化に亀裂が生じ、在日米軍の再編がとどこおることである。

一九九五年の少女暴行事件では、沖縄の過重な基地負担が表面化。日米両政府を揺さぶり、普天間飛行場の返還という、基地を動かさざるをえない結果となったという、日米同盟にとっての苦い経験がある。その二の舞を恐れたのである。また、沖縄県民、国民が、不平等に置かれる地位協定の改定問題にも飛び火することを、極力、避けなければならなかった。

この日米両政府の素早い動きに対し、いち早く〈矮小化〉を危惧し、真の沖縄問題の解決に向けて取り組んだのは、私も共同代表を務める〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉である。事件の二日後には、「海兵隊所属兵士による少女への性暴力に抗議し、軍隊の撤退を求める要求書」を、米国のブッシュ大統領ほか、在沖米軍四軍調整官に送りつけた。

要求書は、「基地・軍隊が存在するゆえに事件は起こり、戦後六二年を経た現在に至っても、女性や子どもたちが安全に暮らせない状況に、強い憤りを覚える」としている。そして実効性のない「綱紀粛正」や「再発防止策」を批判する。

最後に、「軍隊は、構造的暴力組織であり、地域においても、また国家間においても、真の安全は保障しない」と、軍隊の本質を指摘したうえで、軍隊の撤退を求めている。これこそが、米軍の事件・事故を根絶する根本的な解決なのである。

〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉は、県内の女性団体に呼びかけ、二月一九日、北谷町内で緊急の女性集会を開いた。この、「危険な〈隣人〉は要らない」緊急女性集会では、「危険な隣

人」である海兵隊の「沖縄からの撤退」を要求した。

また、二一日には、私が呼びかけ人の一人となり、参議院議員会館で「米兵による少女暴行事件に抗議する院内集会」を開き、『米海兵隊員による少女への暴行に抗議し、米軍の綱紀粛正と再発防止を求めるアピール』を採択。集会後、直ちに米国大使館に向き、アピール文を手渡し、被害者への精神的ケアを十分に行い、「被害者および家族への謝罪および完全な補償を行う」ことなどを要請した。院内集会に参加したのは、呼びかけ人である参議院議員の神本美恵子、岡崎トミ子、福島みずほ、紙智子さんのほか、亀井亜紀子さんら約八〇人。

あいさつに立った岡崎、神本、紙、福島、亀井さんらは、厳しい口調で、人間の尊厳と女性の人権を訴え、「軍隊と人権は相容れないもの」で、最善の再発防止策は「基地の撤去」しかないこと。米軍が実施している教育プログラムの徹底、基地外居住の条件強化や制限には、「地位協定の見直ししかないこと」などを強調した。

私は司会を兼ねながら、地元・沖縄での抗議行動や、これまでの米軍の凶悪事件、基地の実態などについて報告。「平和憲法の下に復帰したが、沖縄は、相変わらず危険との隣り合わせで、〈安心、安全のくらし〉には、ほど遠い」と訴えた。

一方、沖縄県議会をはじめ、市町村議会でも、抗議決議を採択したが、三月二三日に予定される「米兵による少女・婦女子への暴行事件に抗議する県民大会」への参加については、「県議会が参加を見送るようだ」という情報が入っている。その理由は、「この事件を政治的に利用してはならない」ということのようにだが、事の本質と重大性への認識が欠けている、というほかない。

基地を抱える自治体や、民主党、女性団体等が、福田首相やブッシュ大統領あてに抗議文を送りついたり、抗議集会を開いているが、全国的な広がりには、いたらない。沖縄県民の痛みや思いは、「基地を抱える自治体の住民」以外には、理解されることは少ない。

ここで敢えて「沖縄問題とは何か」を問いたい。

沖縄問題とは、一般的には、広義では沖縄県の抱える諸問題であり、狭義では米軍基地問題と解される。

沖縄問題とは、「沖縄の歴史を深く理解すること」である。琉球王国は、薩摩の支配から廃藩置県による「琉球処分」を経て沖縄県となるが、先の大戦では「捨て石」作戦によって、凄惨な地上戦を体験する。そして敗戦後、日本国から切り捨てられ、二七年間、米軍の統治下に置かれた。

一九七二年五月、施政権返還により復帰するが、広大な基地が何ひとつ変わらず存在し、事件・事故は、日常茶飯事である。

さらに最悪なのは、高校の歴史教科書で、これまで〈軍命〉として記述されていた「沖縄戦における集団自決（強制集団死）」が、検定意見によって修正されたのである。

このような歴史と沖縄の現状を深く理解すれば、今回の事件への対応は、自ずと決まる。「基地の撤去」であり、「軍隊の撤退」なのだ。

「基地問題」「沖縄問題」と矮小化させ、「アメとムチ」を使い分ける日本政府と、沖縄県民の沖縄問題に対する基本認識には、大きなずれ、深い溝がある。その溝を埋めるのは、過酷な歴史や不公平さに、日常的に声を発し続けることだ。

（参議院議員）

被害者をセカンド・レイプから守ろう

永吉 盛元

沖縄には、広大な米軍基地がある。日本に駐留する米軍基地の、約三分の二が、狭い沖縄にある。「沖縄に基地があるのではなく、基地の中に沖縄がある」と言われているくらいだ。

一方で、沖縄は、「今次大戦で唯一の地上戦があったところ」であり、日米の多くの兵士の死と、それ以上に多くの住民の生命が奪われた。

今もって地中には、膨大な不発弾が埋もれており、毎日、その処理作業が行われている状態がつづいている。不発弾を全部撤去するには、「六〇年以上もかかる」と言われている。

沖縄には、世界最強の米海兵隊が存在する。「アメリカの青年たちは、〈危険地ゆえに給料の高い〉沖縄基地勤務を目指して来る」とも言われている。この広大な米軍基地からの犯罪の発生は、日常的に起き、絶えることがない。

兵士たちは、基地の中で、破壊と殺戮の訓練を受ける。その兵士たちが基地の外に出て、沖縄の人たちと接するとき、彼らにとっては、特に女性は、「襲うべき対象」として写るのではないか。今回の事件のように、たとえそれが、幼い子どもであろうとも。

今回のような事件は、これまでも繰り返し発生した。私たちは、このような事件を、「乱暴事件」と言ったり、「暴行事件」と言ったりしてきたが、被害者の苦しみは筆舌に尽くしがたい。被害者の

ことを考えると、到底、「強姦事件」とは、言うことができない。

加害者とされる米兵たちも、「基地が生んだ被害者」なのかもしれない。日常的に、殺戮と破壊の教育しか受けていないこの青年たちこそ、「基地のもたらした被害者」なのでは、ないだろうか。

それが、私たちが基地撤去を求める根本の理由である。

今回のような事件が起きるたびに、日米の高官は謝罪するが、当然のことながら、それは何の効果もない。彼らは、「基地を撤去する」とか、「縮小する」とは、決して言わない。米軍基地を、「全くの治外法権」としている「地位協定」を、根本的に改めることさえ、否定しつづけてきた。

そして、日本政府は、「地位協定の運用改善をはかる」とか、「米兵の綱紀肅正を申し入れる」と繰り返すばかりで、何の進展も全く見られない。

今回の米兵の犯行について、沖縄のほとんどの市町村議会が抗議の決議をし、各団体も抗議行動を起こしている。大規模な抗議のための住民大会も行われるであろう。

今回の事件につき、某週刊誌は、被害者の少女とその家族のプライバシーを暴き立てた。いわゆる「被害者にも 落度があつた」というものだ。「危ないはずの米兵」に、気軽に声をかけたことがいけない。」というのである。

この、一部のマスコミの態度は、この種の犯罪を助長させるものであり、許し難いものである。

私たちは、米兵による犯罪が起きるたびに、被害者の生活と人権を守る立場から、被害者がセカンド・レイプに会うことのないよう、強く訴え、抗議してきた。それにもかかわらず、今回も、同様なことが繰り返された。残念でならない。

本件犯行は、なぜ起きたのか。基地あるがゆえに起きたものであることを、しっかりと捉えないと、

いけない。私たちは「基地こそは諸悪の根源」と言い続けてきた。軍隊がある所に性犯罪と凶悪犯罪は繰り返して起きる。

日米の両政府に対し、その撤去を求めるとともに、段階的な縮小をも強く求めてきたが、日米両政府は、聞く耳を持たず、むしろ、「その強化ともとれる行動」をとり続けている。今回の犯人の米兵は、犯行時、基地外にいたので、沖縄県警によって逮捕されたが、もし、基地の中にいたならば、沖縄の警察は逮捕できなかった。手も足も出なかったのだ。

基地に対しては、日本の法律は、ストリートには届かないのである。しかし、沖縄県警と那覇地方検察庁は、この米兵の犯行否認に関わらず、起訴を目指していた。

被害者の少女と、その家族は、告訴を取り下げた。

「これ以上、関わりたくない。そっとしておいて欲しい。」との気持ちだったとのことである。

米兵は、その日のうちに釈放され、米軍に、その身柄を引き渡されたようである。

一般的に、性犯罪は、真相の究明も大切であるが、一方、被害者の立場を優先しなければならない。心ない一部のマスコミの騒ぎ立てが、被害者家族を、つらい立場に追い込んだ結果、告訴取下げに至ったのである。

私たちは、被害者とその家族へのサポートが欠けていたことを反省しなければならない。

被害者が、低い年齢だけに、いっそう、あたたかい配慮が必要だった。被害者の告訴の取下げにより、加害者を日本の裁判所で裁くことは、できなくなつたが、加害者の犯行が許されるはずはない。抗議のための住民大会が、そのために中止されることはないと思われる。この被害者の声を代弁するためにも、沖縄の人びとの怒りは、ますます大きくなるばかりである。

(弁護士)

米兵による少女暴行事件を沖縄から告発する

狩俣 信子

またも発生した米兵による少女暴行事件。——何度起れば終わりがくるのか。

戦後六三年間、起り続けているこの状況に、国は、どう対応しようとしているのか。

沖縄に、日本に在る米軍専用施設の七五%を押しつけ、事件・事故が起こるたびに、米兵の「綱紀粛正」や「再犯防止の教育」を言い続けてきた米軍。その言葉が、むなしく響く。

軍隊・基地があるかぎり、これからも起り続ける「兵士による性暴力」ではないのか。

沖縄からのこの悲痛な訴えを、全国の皆さんに聞いていただきたい。そして、日米安全保障条約や日米地位協定について、もう一度考えていただきたいと思う。

二月十日午後八時過ぎ、一四歳の少女は、言葉巧みに米兵にだまされ、オートバイで連れ去られた。まさか暴行されるとは、考えもしなかったことだろう。

一部週刊誌の興味本位の記事は、少女と家族の心を傷つけ、悲しみの底に、突き落とした。「どこにいても、何をしていても、暴行が許されている」ということには、ならない。

私たち女性はいち早く抗議集会をもった。二月一九日、急な呼び掛けにもかかわらず、三〇団体三二〇人余が結集し、少女の精神的なケアや、損害賠償、在沖米軍基地の早期撤去を訴えた。

青い海、碧い空、降り注ぐ太陽の光……。一見、平和な島というイメージの沖縄で、起こり続ける性暴力を、私たちは許さない。

戦後、沖縄の女性は、砲弾をくぐり抜け、やつとの思いで生き延び、新しい生活を送ろうという時に、新たな恐怖におののいた。それは、米兵による暴行事件が続発したからだ。

十六ある捕虜収容所の中で、あるいはそこから畑に行く途中で、あちこちで、米兵の性暴力の犠牲になった。

捕虜収容所から出た後も、夫の目前でピストルを突き付けられて暴行されたり、また暴行されたことを夫に内緒にしていたが、生まれた子が「混血児」であつたため、離婚になったりした。子どもをおぶつた若い母親も、犠牲になった。追い詰められて崖から飛び降りて、死んだ女性もいた。戦後の女性史は、涙なしには読めない。

米軍の占領意識の前で、沖縄の人権や、人間としての尊厳は、踏みにじられていた。

戦後六三年たった今も、米兵による暴行事件が起こるということは、占領時代を彷彿させ、軍隊のもつ暴力性を見せつけられる。

現在、沖縄には、軍人・軍属・家族あわせて四万四、九六八人が駐留している。軍人が二万二、七七二人いて、陸軍八八〇人、海軍一、九七〇人、空軍七、一〇〇人、海兵隊一万二、五二〇人という内訳になっている。

沖縄でいちばん事件・事故を起こしているのが、(即戦部隊としての訓練を受けている海兵隊)である。女性の人権を無視し、尊厳を踏みにじる訓練が、まさに行われているのだ。「再発防止のための教育

をする」と言いながら、一方で人権を踏みにじる訓練をする、まさに、相反することが行われているのだ。

私たちの生活の場に、このような、あい矛盾する訓練を受けた米兵が同居する危険を、看過することはできない。

沖縄は、四七都道府県の一つの一県である。この一県に、いつまで米軍基地を押しつけているのか。事件が起こるたびに「綱紀肅正」を、何度言えばいいのか。何度聞けばいいのか。

事件が起こった時だけの「お詫び」は、もう要らない。事件が起こらないように、米軍は、ただちに撤去してもらいたい。子どもの安全・安心をつくるのは、私たち大人の責任なのだ。

二月の県議会で、仲井真知事は、「少女の痛みは、よくわかる。が、それが直ちに米軍の撤退にはならない」と、消極的な発言をした。日本政府の高官の発言と、まるで同じである。

表面化しない暴行事件も、たくさんあることを思えば、せめて海兵隊の撤去を実現するべきだ。

プエルトリコのピエクス島は、島の半分以上が米軍基地であつたが、住民の粘り強い運動で、二三年前に撤去させたと聞く。

私たちの闘いは、「核も基地もない平和な沖縄をつくること」である。

基地が撤去されることにより、今回のような暴行事件は、確実に減っていく。

そのためには日本の国民が、安保条約や地位協定について、真剣に考えていただきたい。

もしも基地が必要と思うなら、どうぞ、ご自分の住むところに基地をもつていただきたい。

「必要でない」というのなら、私たちと、基地撤去を、真剣に取り組みましょう。（沖縄県議会議員）

知事や政治家の「甘い認識」

比嘉 京子

県議になって四年目を迎えようとしている。県議会の質疑の五割以上が「基地問題」である。

ちなみに復帰後（一九七二年五月から二〇〇八年二月末現在）の沖縄県議会において、米軍による事件・事故に関連する意見書および決議件数は三三一件。政府への議員派遣数は五八回である。

このたびの事件に、沖縄県議会二月定例会も、また質問が集中した。特に仲井真県知事の対応のあり方への批判が、日を追うごとに大きくなっていった。

この事件で、知事は、謝罪に來た四軍調整官、メア米総領事らに二度も握手をし、遅い時間に県庁まで足を運んだことをねぎらい、会談後はエレベーターホールまで見送ったことについて、「知事の態度は本心に憤りをもっていたか疑問であり、社会常識や県民感情に反するものと思う」との声があがった。

「組織の代表が謝りに、私のところ、県庁まできて、そして謝っていった。」

それに対して、「握手をし、エレベーターまで送るというのは、社会常識だ」と反論した議員が、さらに「抗議は形式的で手ぬるく、米国との友好関係を重視している」と指摘したところ、「当然とるべき最低限の社会常識で、県民の、感情意識にぴったりあっている」と答弁した。

また、議員からの、「このような事件は基地があるがゆえの事件であるから、もはや防ぐことはできない。

沖縄から米軍撤退を求めるべきではないか」との問いに対し、知事は、「一部の不心得者が発生したからといって、また我われが、怒り心頭に発したからといって、国防だとか、アジアの安全のことも考えずに、全体の組織を帰還させるという論理は、あまりにも飛躍がありすぎて、とても考えられない」と答えた。

その答えに対し、他の議員から、「県民の安全第一を考えるべき沖縄県知事ではなく、国の立場に立った発言ではないか。沖縄県知事は、日本国総理大臣も兼ねているのか。復帰後、五千件余の事件が起こっている。今回の事件を機に、海兵隊の撤退を検討すべきではないか。それとも国防やアジア・太平洋の安全のために、このような事件は県民として耐え忍ぶべきことなのか」という反論があがった。それに対し知事は、「海兵隊の撤去、即、そこへ飛ぶ、ということは、明らかに現実的ではない」と私は申し上げているわけで、事件・事故が起こらないように、県民の安全第一に考えるというのは、当然のことと思っている。「（アジア・太平洋地域の安全を守る）のと、（少女の安全を守る）のは、どちらが大切かというご質問でありましたが、これは選択で考えるようなものではありません。（どちらが大切かというような基準で考えるものではない）」と、考えております」と述べた。

これまで米軍人による性暴力を受けた被害者たちは、このような（県議会の）やりとりを、どのような思いで聴くのだろうか。

知事も、議員も、遺憾の意を表し、「あつてはならないこと」「再発防止の徹底」「綱紀粛正」を求めることなどが、おきまりの文句である。もはや歴史的事実が再発防止など適用しないことを、語っている。基地撤去以外に解決の道はないのである。

知事は、基地の重要性を認めつつ、県民の安全確保もまた大切であるとの認識である。

基地を認めるということは、基地から派生するあらゆる事件・事故を認めることに、ほかならない。すなわち「基地と県民の安全は両立しない」のである。

一九九五年の、あの少女の事件の県民大会での四つの決議が実行されていたなら、今日このような事件は起こりえないはずである。このような、なまぬるい姿勢では、被害者の受けた屈辱感をぬぐうことはできず、「自分ひとりで終わりにしてほしい」と叫んでいる被害者を、絶望の淵へ落とすようなものである。絶え間なく起こる事件に、被害者たちは胸をえぐられる思いをしているのである。

私は、まず歴史的事実を知ってほしいと考える。私は質疑の中で、一九四五年から二〇〇四年までの（それ以後も起こっているが）訴えのあった（訴えないほうが圧倒的に多いとされている）性暴力について、〈基地・軍隊を許さない女たちの会〉の調査による実態を、紹介した。

被害者総数二五八人（十代未満 五人、十代 五九人、二〇代 九四人、三〇代 三七人、四〇代 二三人、六〇代 六人、その他 三四人）に対し、加害者総数は、四九三人。加害者のうち、処罰を受けたのは、わずか三三人（六％）。この数字が氷山の一角であることは、疑う余地のないところである。

被害者状況を的確に説明している文章を一部引用し、紹介する。

＊「米兵にとって、女であれば、年齢は関係なかった。生後九か月の女兒が高熱を出して病院に運ばれてきた。女兒は下腹部にレイプによる裂傷を負っていた。食べ物探しや農作業中、井戸や川辺での洗濯中、銃やナイフで脅して、家族や知人らの目の前で、三、六人の集団に襲われ、さらに基地内に連れ込まれて、別の集団に輪姦され、子連れの女性は子どもとともに拉致・レイプされ、その後、絞

殺される。被害者は〈子どもから六〇代まで〉と分析される。」（黒澤亜里子編『沖国大がアメリカに占領された日』——宮城晴美氏「ねらわれる女性たち」）

このような筆舌に尽くしがたい残酷な事件が、実にA4判二五ページにわたり、記されている。

「このような過去の情況の延長線上に、今回の事件がある」という認識を共有すべく、説明したのであった。

説明後、私は、次のような質問をした。

① 知事は、この冊子の、どのページでもよろしいですから、一ページお読みいただきたい。

② このように多くの女性・子どもの人権を侵し続けた歴史の一端に触れられたご感想を、お聞かせください。

③ 次にこのような事件が起こっても、「東アジアの安全」と「少女の安全」の、「どちらも大事だ」と、知事はおっしゃいますか。

④ 一部の不心得者が発生した事件……云々は、現時点でも同じお考えですか。
以上の問いに、知事は、

① 「それは勘弁していただきます。何で私が読まないといけないのか。「あれ読め」、「これ読め」と言われて、「わかりました」と、いちいち議場で読んでいますか。読んでいないでしょう。それはお断りします。」

② については答弁なし。

③・④は、他の議員と、ほぼ同じ答弁である。その後、私が「今議会の議場での知事答弁は、県民

の人権を預かる最高責任者としての認識が欠落しています。そのうえ知事は、言葉で少女をセカンド・レイプしています」と発言したところ、与党議員の野次の応酬となり、議場が騒然となった。

議長は「不適当発言」だとし、撤回を何度か求めたが、私が応じなかったため、議会は四時間半、空転した。

私は、最終的に懲罰委員会も辞さないつもりであつたが、「三月二三日に予定されている県民大会の（超党派での開催）が難しくなる」とささやかれ、感情論によつて政争の具にされることは、私の発言の本意ではないので、やむなく、与党案の謝罪文である「セカンドレイプ発言」を謝罪、撤回することにした。

ところがその二日後、自民党県議は協議し、県民大会不参加方針を打ち出したのである。

その理由は、「今回の事件を受けて日米政府は早期に対応している」「九五年のときは、政府の対応に問題があつたが、今回は違う」「野党とは考え方に相違がある。大会を持つて解決できるようなものではない」などの理由で、参加見送りを求める意見が大勢を占めたと報じている。

議場の、あの騒然とした光景を思い出すにつれ、いかに県議会の中でジェンダー論に対する理解がないか、また性暴力についても関心、知識ともに認識されていないか、ということを実感する。

被害者の少女が告訴を取り下げた背景は、このような政治家や社会の認識の低さと無関係ではない。「事件を受けて」ではなく、常日頃から性暴力事件を被害者の個人的問題に還元することは、いっさいやめ、「男性中心主義を克服していく社会の仕組みづくり」に取りくんではないかなければならない。

（沖縄県議会議員）

基地と軍隊を裁く——日本政府も、米軍犯罪に加担

安里 英子

この狭い沖縄島に、どれだけの軍隊が駐留しているのだろうか。そして彼らは、どこに住んでいるのか。沖縄に住む米軍関係者(米兵・軍属・家族)は、四万四、九六三人で、そのうち 基地外居住者は、一万七、〇四八人、である。最も多いのは北谷町の二、八九三人。この数字をみれば、基地の内と外の区別がないことがわかる。基地の外、つまり民間地域に、いったいどれだけの米兵が住んでいるのか、今度の事件で、国会で追及されるまで正確な数字を日本政府が把握していなかったということは、「あまりにもずさん」としか言いようがない。なぜならば、基地内の兵舎が、すべて「おもいやり予算」で建設され、基地外の米兵むけ住宅の家賃(二〇万円から四五万円)も、「おもいやり予算」から支給されていると聞く。「これらのすべてが私たちの税金でまかなわれている」ということは、言うまでもない。

米軍基地周辺では、米兵による性的暴力が日常的に起きている。多くの被害者のほとんどは、訴えることもなく一人で悩み続けている。私たちが知ることができるのは、「勇気をもって訴えることができた人」だけだ。

最近、『ザ・レイプ・オブ・南京』(アイリス・チャン著)を読んだ。大陸系台湾人、中国系アメリカ人となったチャンの書く、日本兵による虐殺・レイプは、すさまじいものがある。証拠として掲載

されている凌辱された女性たちの写真を見て、私は夜中に眠れず、心臓がおかしくなった。つまり、レイプとは、そのようなことなのだ。だが、性的暴力を受けた経験をもった人以外には、その恐怖とおぞましさは、理解できない。

なぜならば、いかに沖繩が「準戦闘状態にある占領地」とはいえ、今日の私たちは物的な豊かさを享受し、みせかけの平和も、すこしばかりは手にいれている。だから、米兵による性的暴力がどのようなものであるのか、想像力をめぐらし、理解することができないのではないか。それだからこそ、「ついでといったのが悪い」という、被害者へのバッシングにつながっていくのだ。

本来、被害者の立場に立ち、もっとも被害者のケアをしなければならないはずの学校も、「安全教育を徹底させなければならぬ」という対策しか、うちだせなかった。なぜ「安全教育」という前に、「基地あるがゆえの被害」「基地の撤去」を言わないのだろうか。それを言わない限り、被害者の少女は自らを責め、追い詰められるばかりだ。

今回、目立ったのは、被害者への、バッシングだった。特に顔の見えないインターネットによるもの。なにより、許せないのは、『週刊新潮』の記事である。被害者の家族のプライバシーまで、侵害している。その直後、被害者は、告訴を取り下げた。

被害者を、そこまで追い込んだのは、いったい誰か。

数日後、『琉球新報』に掲載された次の記事は、その問いの一部に答えてくれる重要な記事である。米国防総省の『全世界米兵性犯罪報告』では、沖繩での米兵女子中学生暴行事件のように、「訴え取り下げの件数」が増えている実情も、明らかになった。米国内の被害者支援団体などは、「軍組織に

「潜む暴力性」を指摘している。米兵による性犯罪で、「取り下げ件数」が大幅に増えている情況について、米国内で、性犯罪被害者へのケアサービスを提供するNPOマイルス財団のK・H理事は、「一般のケースと違い、加害者が軍人の場合、被害者の恐怖心が拡大しやすいためだ」と分析し、軍隊組織の暴力性が影響している」との見方を示す。

軍隊への恐怖心だけではない。アメリカの軍隊と防衛省は、被害者に対して具体的な圧力をかけたのではないだろうか。以前、基地内で働くフィリピン女性が米兵に性的暴力を受けた際、さまざまな形で、その事件がもみ消されたように。

いま、沖縄で起きている米軍犯罪は、すべて、国際法によって裁かれるべきである。

いや、占領時にさかのぼって裁かれるべきである。米軍は、一九四五年に沖縄に上陸すると、ただちに住民を収容所に入れ、その間に土地を奪い、軍事基地を建設した。住民の同意なしに、暴力的に土地を奪い、住民を追放して「難民」状態にしたことは、すべて国際法に違反している。それだけではない。「民間人を収容所に強制収容したこと自体が国際法違反だ」と言われている。

米軍は、住民を収容所に収容したのは「保護」のためと言っているが、収容所の中で、多くの女性たちがレイプされたのである。

解決策は、「すべての軍事基地の撤廃」しかない。日本政府は、あいも変わらず安保条約にしがみついているが、ただちに安保条約を破棄すべきである。そうでなければ、アメリカを、「犯罪に加担している」という意味で、日本政府も国際的に（ICC）で裁かれなければならない。

（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会）

沖縄だから、許されるのか

仲村 未央

沖縄市基地政策課が調べた「市内における過去五年間の米軍構成員及び外国人による犯罪発生件数」は、二〇〇三年度、三十一件、〇四年度、十一件、〇五年度、十七件、〇六年度、二十件、〇七年度、十八件（〇八年二月二三日現在）で、計九七件に及ぶ。「犯罪者の所属する米軍隊別」では、海兵隊二九件が、最も多く、続いて空軍二十一件、陸軍七件、海軍五件となっている。

頻発する犯罪の実態

私が所属する〈沖縄市議会基地に関する調査特別委員会〉は、「米軍米兵が絡む事件事故」の都度、開かれるが、最近の犯行の悪質性と頻度は、目に余るものがある。

今年は正月早々、米兵によるタクシー強盗事件が発生。一月七日未明、タクシーに乗車した二人の米海兵隊員が、住民が寝静まる閑静な住宅街へと車を案内させ、運転手をウイスキー瓶のようなもので殴りつけた。運転手が車外へ逃げた後も、二人は、瓶と棒を持って追い回し、暴行を加え続けた。悲鳴に気づいた住民が表へ出て、警察に通報したため、現場から逃走した容疑者は、まもなく逮捕された。運転手は前歯十本が折られるほど殴られ、取材に対し、「死ぬかと思った」と証言している。

これに先立ち、昨年十月には、暴行致傷事件が発生。嘉手納空軍所属米兵の息子が、十月一日未明、

客を装って入った市内飲食店内で、従業員女性の顔をビール瓶で殴り、強姦するという事件を起こした。冒頭の基地政策課の調べでは、米兵が起こす犯罪は、深夜未明に集中している。全体の六七％が、夜十一時～朝七時に発生。強盗、強姦などの「凶悪犯」、暴行、傷害、住宅侵入などの「粗暴犯」に限れば、実に七四％が、この時間帯の発生だ。

米軍と日本政府外務省は、「再発防止策」として、「兵士の夜間における外出」を制限し、「教育プログラムを実施している」と説明するが、本来外出しないはずの時間帯に、民間住宅地を堂々と徘徊し、事件・事故を起こしているのだから、その対応が、いかになまぬるいものであるか、わかる。

今回の中学生に対する暴行事件直後の「綱紀肅正」「外出禁止」の大号令下でさえ、「住宅侵入事件」「飲酒運転」、さらには「基地のフェンスを乗り越えて民間地域に侵入、市内の建設業協会事務所のガラス戸とドアをたたき割る」、などの事件も起きた。

それでも日本政府は、「沖繩だから仕方ない。去る大戦によって米軍に占領され、日本復帰した後、も極東最大の米空軍・嘉手納基地を抱える街なのだから、凶悪犯罪が頻発するのは当然だ。」とも思っているのだろう。「遺憾の意」を示し、誰も責任をとらず、やがてニュースが別の話題に変わって、国民の目が沖繩を離れば、それでおしまい……、である。

制御不能な「良き隣人」

規律を保てないような組織が「良き隣人」を標榜し、「世界にも類がないほどの過密さで住民地域に隣接し、駐留している」こと、そのものの、異常さについて、沖繩県民は、改善を求めている。

具体的には、「海兵隊の撤退」による実質的な兵力の削減と、軍人の特権的地位を保障する「日米地位協定」の改定を、要求している。

この二つの課題に正面から取り組まずして、事件の再発防止はない。しかし、外務省は、県民の要求に対し、すぐさま「議論が走りすぎている」「アジア太平洋地域の安全保障のため」「地位協定は国際的にもスタンダードだ」と反応し、〈事件の背景にある沖縄の状況〉には、触れようとせず、「二人の不心得な兵士が起こした事件」として、問題を矮小化するのに必死である。

では、示してほしい。市町村面積の半分、なかには八〇%以上を、駐留軍占用地が占める自治体が、沖縄以外のどこにあるか？ どの国にあるか？

戦後六三年が過ぎても、「強制収用された自分の土地に帰れず、フェンス一枚隔てて立ち入ることさえできない」現実には、納得できるか？

住宅地の頭上を戦闘機が昼夜を問わず飛び交い、その被害に耐えかねて裁判を起こした者が、国から「基地に近づくほうが悪い」と言われたら、狭い沖縄の、どこに住めばいいのか？

民間地、公務外であつても「犯罪を起こした米兵の身柄は、一義的には米軍に保護される」ことを謳う〈地位協定〉。——日本の警察が起訴するまでのあいだに証拠隠滅や、口裏あわせが行われるかもしれない。身柄の引渡しが行われるかどうかは、米軍の「好意的考慮」による……。

——それでも私たちは〈主権国家〉の国民と言えるか？

「沖縄だから」許されるのか

二〇〇四年、沖縄国際大学に堕ちたヘリ事故の顛末は、記憶に新しい。

事故発生時から、事故機残骸の撤去に至るまで、地位協定を盾にされた沖縄県警は、民間地である現場に立ち入ることさえできず、大学関係者も、すべて締め出され、海兵隊に封鎖された。

合同捜査を拒否された県警は、数週間後、米軍が去った後に、周辺目撃者からの聞き取りによって被害状況を確認したが、最後まで、事故機を操縦していたパイロットは、名前すら特定できなかった。これに対し、「日本政府が毅然とした態度で抗議する」などということではなく、あろうことか、時の首相は、「事故の一報を受けてもゴルフに興じていた」ことが、発覚した。

そんな県民の扱われ方を見れば、米軍には、沖縄が今も「占領地」に見えるはずである。「占領地の人びと」に対する、傍若無人。人権を無視した振る舞いの根っこに、そんな目線を感じずにはいられない。それにひきかえ、米軍への厚遇は、申し分なく、日本政府は、古くなった普天間基地の代わりに、最新鋭の基地も造ってくれるし、グアムへの移転費も出してくれるという。

一方、県民には、償いのつもりか、怀柔策か、〈基地を容認する態度を見せる〉と〈振興策に対する補助金〉が降り、〈反対すれば降ろさない〉という仕組みを露骨にしたのも、昨今の行政の特徴だ。選択を迫られた住民は、いたいたしく分断されている。

それが「沖縄」であり、「岩国」である。暴力は、弱い者へ、弱い者へ、と集約され、あぐくの果てに、少女の、「人間としての尊厳」までもが奪われた。

「安全保障の足元で、日米のパートナーシップの名の下に、その代償として払われる『小さな島の日常の犠牲』は、しょうがない」と、あなたも思いますか？

(沖縄市・市議会議員)

「自分の子ども」と思って

玉那覇 淑子

「どうぞ皆さん、この少女を、へ自分の子ども」だと思ってください。〈自分の孫〉だと思ってください。こんなことが許されていいと思いますか。」——怒りと口惜しさに震える、北谷町砂辺区の自治会長。「安心して町も歩けないこの島は、いつたい、どこの国ですか。」——女性代表として、怒りを訴えた沖縄市婦連会長。

二月十日に発生した、米兵による少女暴行事件への抗議行動「危険な隣人は要らない」緊急女性集会での一声である。

〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉は、事件発覚後すぐに、記者会見を開いた。

真っ先に、被害者である少女を非難することがないよう、マスコミにも強く要望し、次のことを訴えた。

- ① 暴力を受けた少女への精神的ケア。
- ② 少女への謝罪と補償。加害米兵の厳正なる処罰。
- ③ 基地外に居住する米兵の行動の規制。
- ④ 基地の撤退を求める要請。

翌十三日には、在沖米総領事館に、ケビン・メア総領事を、四名の代表が訪ね、要請書を提出している。緊急女性集会の取り組みは、すぐに始められ、呼びかけ団体として、三十余の団体が名前を連ねた。

事件発覚後九日目の、二月十九日、「危険な隣人は いない」緊急女性集会が開催された。

わずかな日数での取り組みにもかかわらず、三五〇余名（九割は女性）の皆さんが結集した。

〈行動する女たちの会〉共同代表の、高里鈴代さん、糸数慶子さんはじめ、野国北谷町長、東門沖縄市長ほか十八名の皆さんが、次つぎに米軍人軍属である加害者、米国、日本政府へと、「収まらない怒り」をぶつけた。そして、全員の合意で、集会アピール文が採択され、内閣総理大臣・防衛省・県知事のほか、在沖米総領事などにも提出されることに。

① 暴力を受けた少女への精神的ケアを十分に行なうこと。

② 被害を受けた少女への謝罪と補償。加害米兵の厳正なる処罰を行なうこと。

③ 基地外に居住する兵士の実態の把握とその見直しを行なうこと。

④ すべての在沖海兵隊の撤退。

⑤ 県民大会の開催。

一方、県内議会では、県議会をはじめ四一全市町村議会が、抗議決議を議決。県・子ども育成連絡協議会、県・婦人連合会などが、県民大会を目指す実行委員会準備委員会を開き、三月二三日に県民大会の開催を決定。超党派の結集を呼びかけるとともに、県議会へ大会の要請を行なっている。

そんな矢先、とんでもないニュースが入ってきた。「告訴取り下げ」・「加害者釈放」。

一番恐れていたことが、少女の身に起こっていた。被害少女へのバッシングだ。

一部マスコミによる少女への誹謗中傷。——少女や家族の口惜しさを思い、絶句した。

少女の言葉として伝えられたのは、「そっとしてほしい」の一言。血の気が引く思いであった。

米軍人軍属の引き起こす事件・事故が後を絶たないこの沖縄で、子や孫たちを守る手だてを、いっ

たいどこに求めれば良いと言うのか。

これまでの、〈米兵による事件で犠牲になった少女や女性たち〉の屈辱を思い、怒りで震えた。

日本復帰から、もうすぐ三六年。——この間、米軍人軍属による事件・事故は三二万九千件余にも
のぼり、そのうち、凶悪犯罪は五四三件。その中に、女性や少女に対する暴行事件が一三八件も占め
ている（昭和四七年〜平成一七年の間）。

一九五五年に、当時六歳だった少女、由美子ちゃんが、強姦殺害され、捨てられるという、何とも
おぞましい残虐極まりない事件が起きている。さらには、あろうことか一週間後に、また九歳の少女が
強姦されている。鬼、畜生にも劣る米兵の凶悪犯罪は繰り返され、由美子ちゃん事件から四〇年後の、
一九九五年にも、一四歳の少女が三人の米兵にレイプされる。ほんとに、はらわたの煮え繰りかえる
事件だった。沖縄じゅうが怒り、八万五千余の人がとが結集する大きな県民大会となった。にもか
わらず、その後も何一つ改善されることなく、事件は起き続けている。

しかし、このような恐ろしい犯罪も、明るみに出るのは氷山の一角で、中には深い闇の底に心を追
いやった女性たちがいることを、私たちは知らなければならない。こうしたことから、今回、一部マス
コミのバッシングや誹謗中傷で傷ついた少女が「告訴取り下げ」の手段をとらざるを得なかった心中
を思うと心が痛む。だからこそ、事件の加害者である米兵を、私たちは、絶対に許すわけにはいかない。
多くの裁かれるべき米兵たちが、日米両政府に守られ、フェンスの中に匿われ、「思いやり予算」で
快適な住居を与えられ、人殺しの訓練に励み、この島で、何食わぬ顔で生きている。「危険な隣人として」
もう、これ以上の犠牲は絶対にごめんだ。私たちは声を大にして叫ばねばならない。女性や子ども
たちの人権を取りもどすため。子や孫たちを守るために。

（北谷町議会議員）

「またも被害者を生んだ」自責のなかで

浦島 悦子

二月一〇日に起こった「米兵による少女暴行事件」の報に接して、私と同じように、多くの沖縄県民が、一九九五年の同様の事件を思い起こしたことだろう。あのとき一〇万人の県民大会を実現した私たちは、「少女を守れなかった大人の責任」を問い、「二度とこんなことは起こさせまい」と、固く誓ったはずだった。

しかし、その後も、事件・事故は起こり続けて、結局のところ、十三年間、何も変わらなかったのだ。その現実を目の当たりに突きつけられて、今回の被害者少女、そして、現在は二十代半ばになつているだろうあのときの少女（――二度と自分のような思いをして欲しくないと、勇気をふり絞つての告訴が報われなかったことを、彼女は、どんな思いで見ているだろうか……）に対する、どうしようもない申しわけなさが、私の胸をさいなんだ。

今回の被害者が「告訴を取り下げたこと」は、さらに私の心を重くした。一部週刊誌やネット上で、被害者とその家族に対するバッシング（軽率、しつめの不行き届きなどを責める）がエスカレートしていることに憤り、胸を痛めていたが、「そつとしておいてほしい」という家族の言葉は、彼女・彼らを支えきれず、追いつめてしまった私たちの責任を、厳しく問うていると思う。

「遺憾」「網紀肅正」「再発防止」「(米兵の) 夜間外出禁止」「教育の徹底」……。

十三年前と同じように繰り返される言葉が、むなく響く。県内全自治体が抗議決議をあげ、県民大会を持つても、変わらなかった(既視感)が、やりきれない。

基地の整理縮小どころか、日米両政府は九五年の事件をうまく利用して、人口密集地にある普天間基地を返還する代わりに、その代替施設(県内移設)という名目で、新たな基地建設を押しつけてきたのだ。新基地のターゲットとされた名護市東海岸に住む私たちの苦難は、そこから始まった。

昨年十二月二一日、名護市民が「基地ノー」の意思を世界に向けて発信した「九七年の市民投票」から、十周年を迎えた。

市民や住民の意思など、虫けらほどにも思わない日米両政府と、それに迎合する沖縄のミニ権力者たちに振り回され、踏みつけられて、傷つき、ズタズタになりながらも、十年以上、何とか持ちこたえてきた。

「(二〇一四年までの施設完成)」という日米合意を至上目標」に、法を無視し、暴力的で、姑息な、あらゆる手段を弄して建設を強行しようとしている日本政府に抗して、「未だ基地建設のための杭一本打たせていない」ことは、私たちの誇りだ。

沖縄戦後、六三年、日本復帰三六年。沖縄に米軍基地は居座り続けてきた。

その間に、何度も大きな事件や事故が起こり、基地撤去に向けた県民の、大きなうねりがあった。

しかし、それは基地の撤去どころか、整理縮小にさえ結びつかず、基地機能は、ますます強化されている。基地がらみの補助金は、沖縄社会の隅すみにまで入り込み、「麻薬漬け」を助長させている。「社会・経済・人びとの精神……あらゆるものに浸透し、ゆがめている「基地」と、それを許している私たち自身が、少女に被害を及ぼし、さらに彼女の口封じをしたのだ」と思わずには、いられない。

沖縄社会に根を下ろしてしまつたかに見える「基地」を撤去するのは、並み大抵ではない。それは、いわば自分自身を撤去するような痛みを伴うからだ。しかし、だからこそ、私は、「どんなに相手が巨大であろうとも、どんな力を使つてしようとも、新たな基地は、絶対に造つてはならない。造らせなくてはならない。」と、改めて心に誓うのだ。

子や孫たちに、負の遺産を残すのではなく、この島のかけがえのない宝……自然と、そこに依拠した人びとの暮らし……を引き継ぐことが、大人としての責任だと思うから。

(へり基地いらない二見以北十区の会 共同代表)

「沖縄の声を聞いてください」をお読みになつた方へ――

〈沖縄〉へのメッセージ。〈その少女〉へのメッセージ。

掲載された文章へのご感想。

そのほか「あなたの想い」を「あごら」まで送ってください。

五月に「ヤマトから沖縄へ」――連帯号をつくります。共に闘いましょう。

「イラクからユニオン」へ

富田 沙織

私は、高校生だった二〇〇三年二月一六日から一週間、イラクに行ってきました。

イラク攻撃が開始されたのが、次の月の三月二〇日ですから、そのちょうど一か月前でした。

私の「イラクのイメージ」は、劣化ウランや経済制裁で、そこに暮らす人びとは、「とても苦しんでいて、かわいそうな人びと」と思っていました。しかし、実際に行くと、歌や踊りが大好きで、とっても明かるい人たちに会いました。私は前まで、イラクなんて、名前を聞き慣れなかったくらいなのに、イラクの人たちは、日本のことを「ヤバーニ」と言って、とても親近感を持って接してくれました。「広島・長崎に原爆を落とされて、大変な思いをして立ち直った国」として、日本は、イラクでは、「とても有名な国」だということを、後で知りました。

イラク滞在中は、いろいろなところに行ったのですが、一番印象的だったのが、アメリカ・シエルターというところです。女性や子どもが避難していた大きなシエルターを、アメリカ軍が落とした二発の劣化ウラン爆弾が直撃。一八〇〇人が死亡。シエルターの跡には、まだ、人の焼けたススが、こびりついており、即死したであろう我が子の影が、爆発したときの熱でくつきりと壁に刻まれています。それを見たとき、自然と涙が溢れ、止まりませんでした。あんなに惨いことを、実際に肌で感

じたのは、初めてでした。

シエルターは博物館として残されていましたが、あれは過去の遺物でも何でもなく、「現在でもイラクで進行していること」なんだと思います。イラクでは、反戦デモにも参加しました。イラク人の結婚式にも参加しました。

イラクに行つて、私が思ったことは、「イラクの人びとは、助けてを乞うているわけではない」ということです。イラクの人びとに会つて、「助ける」なんて言葉は、とても傲慢だと思いました。

イラクの人びとは、戦時中にも関わらず、日本人より、よっぽど生き生きと暮らしていました。

「日本は、なんて貧しい国だろう」と思つたくらいです。

日本に帰つてきてしばらくは、気持ちの整理がつかず、何をしたらいいのかわからない日々を送っていました。「イラク攻撃が開始された」というニュースが流れても、自分の怒り、悲しみ、悔しさを、どうすることもできませんでした。

二〇〇四年から、東京の「オープンスペース街」という「精神障害者」の作業所で働くことになりました。この作業所は、とつても変なところで、リサイクルショップなんです。店中に、イラクの写真や集会の写真が貼ってありました。そして、「戦争を止めるためにはどうしたらよいか、世の中を変えるためにはどうしたらよいか」を毎日議論している場でした。

ここで、私は辺野古と出会いました。辺野古というところでは、「戦争のための基地」の建設を止めるために、必死で闘っている。私が闘う場所はここだ！ と思いました。

そして、辺野古の座りこみに参加し、海上の阻止行動にもカヌー隊として参加しました。屈強な作業員十人くらいに囲まれて、とっても怖かったときも、イラクで命がけで闘っている人びとに思いを馳せて、頑張ることができました。

その頃、名護では、「ジュゴンの家」というリサイクルショップをやっていました。辺野古の基地をやめるために、地域の拠点として二〇〇〇年につくられた店です。そこで、毎日のように阻止行動の様子を話し、「ぜひ辺野古に来て欲しい」ということを訴えました。

でもある日、お客さんがこんなことを言いました、「職場では、基地の話はおろか、政治の話は、全くできない。上司に目をつけられると、どこに飛ばされるかわからない……」

私は、このような名護の現状を知って、とってもショックを受けました。ただ単に「辺野古に来てください」と訴えるだけでは、通じないことに、気づかされました。そして、私は、辺野古の基地を止めるためにも、戦争のない世の中をつくるためにも、労働組合をつくることを、決意しました。

「基地をつくるのも、基地を維持するのも、労働者。立ち上がったらず基地は止められる。そして、すべての労働者が立ち上がったら、戦争を必要とするこんな世の中なんかひっくり返すことができる。」二〇〇六年の韓国の労働組合の集会に参加して、「労働者の力」が、確信になりました。ソウルの中心地でも、軍用の道路を占拠して、集会を行なったのです。ふだん、資本家の都合で動いていた街が、労働者のものになった瞬間でした。「こんなことができるのかー」と感動しました。

そして、「日本でも、絶対にこんな状況をつくりたい」と思いました。

組合の委員長になって、三か月が経とうとしています。まだまだ手探りですが、組合員と、一所懸命、

組合づくりをしています。そして、三月一六日の日曜日には、〈イラク反戦五周年 全世界一斉行動 IN 沖縄〉を、那覇の県庁前で行います。

私の原点であるイラク。イラク戦争は、まだ終わっていないし、ここ、沖縄から、たくさんの米兵がイラクへ向かっています。

少女暴行事件も、「戦争のために人間性を奪われた米兵」が行ないました。心も体も傷ついた少女のことを思うと、涙が止まりませんでした。この話をお店のお客さんにしたら、「自分の母も、小さいころ、米兵が少女を襲った現場を目撃した。もう六〇年以上も前のことなのに、本当に昨日のことのように覚えているのよ。」と、言っていました。基地を押し付けられてきた歴史、そして怒りが、私たち一人ひとりの意識に、深く刻まれています。基地があるかぎり、このような事件は、決して防止できません。イラク戦争と少女暴行事件に、基地と、すべての労働者は繋がっています。

私には六か月になる子どもがいます。子どもの将来を考えると、もう退くに引きません。

絶対に戦争を止める。子どもを「人殺し」にさせない。子どもを生かすためには社会をひっくり返す。それが、子どもを産んだ責任だと思っています。

労働者の非正規雇用化、失業、低賃金、重労働、貧困。私たちは、こんな世の中では、もう生きていきません。「私たちの力で必ず世界は変えられる」と確信しています。——時には涙を流しながら、時には喧嘩しながら、心を同じにする仲間をつくることができれば、絶対に負けないと思います。

こんな世の中は、とつとと変えちゃいましょう！

(沖縄北部合同労働組合委員長)

基地ある限り 事件・事故は、なくならない

西村 あやこ

またまた思い知らされる事件が起きました。

「二九九五年、沖縄県民の怒りの大集会」を、私たちは忘れない。でも、そのあとも、一四件も、こうした事件があったというではありませんか！

私は、事件後の二月一日、沖縄に飛び、事件のあった、北谷町、沖縄市コザ、そして加害者米兵の住んでいた家のある、北中城、さらに読谷村と、名護市、辺野古を訪ねました。

辺野古市に向かった日の早朝には、辺野古の民家に泥酔した米兵が侵入した事件が起き、さらに、「フィリピン人の女性が、米兵に暴行を受けて大怪我して入院」という報道。本当に、怒り爆発です。「綱紀粛正、再発防止」を何万回約束したって、何の薬にもならないことを、沖縄の人びとも、私たちも、骨身にしみて知っています。

政府の出した防止策に、「日米共同パトロール」というのがあります。でも、沖縄では、即座に、「これは逆効果！ なぜなら、事件後、日米どちらが犯人の身柄を確保するかが重要なのだから」と、反論していました。当然です。

沖縄県内の自治体は、次つぎと臨時議会を召集して、抗議声明を挙げていましたが、中でも読谷村は「危険な基地の撤去」を要求項目に入れた「全員一致の決議」でした。

そして帰郷した次の朝、自衛隊のイージス艦が漁船に衝突して、漁民の父子を殺したのです。「そのけそこのけ軍艦が通る」の軍事優先社会の現情が明らかかな事件です。

「基地・軍隊は要らない、戦争絶対反対」しか、安全はありません。

*

今回の事件は、基地の外に居住する米兵が起きました。基地外居住者は住民登録をせず、米軍が幹旋しているために、実態が把握されずに来ました。外出禁止令も関係ないわけです。

今回、米軍は、基地外居住者数を、ようやく発表しました。沖縄県合計一万三一九人、本土は合計で一万一、五六六人。このうち神奈川県五、六七二人。その県内で一番多いのが横須賀市三、四二〇人。相模原市は一一九人ですが、厚木基地と、キャンプ座間近郊の、座間、綾瀬、海老名、大和市などを加えると、一、二三二人です。これは、まさに基地がはみ出してきている。「基地拡張」とさえ、言えることではないでしょうか。

政府は、毎年「思いやり予算」を約二、八〇〇億円。そのほかの支援金を入れると、「七、〇〇〇億円近い額を米軍に支出している」と言われています。基地内の米軍住宅建設費も、「思いやり予算」です。

読谷村で新築の米兵向け住宅も見てきました。家賃は四〇万円と聞きました。沖縄市では二八万円という話も聞きました。

とにかく法外の家賃を支払って、不動産屋を抱えこんで、「経済発展に寄与している」（キャンプ座間の渉外部長の言葉）などというのです。市民は「貧困と格差」に苦しんでいるのに、です。

いま、わが町、相模原市は、「米軍の再編計画と呼応した自衛隊の本格的軍隊化」の下で、日米協力の戦争指揮所になろうとしています。昨年十二月一九日に、キャンプ座間に、米陸軍第一軍隊司令部が

正式発足し、相模総合補給廠には、「一部返還（有償）、一部共同使用」という鉛玉（？）の代わりに、戦闘訓練所、モータープール（ハンビーなどの軍用車両が三〇〇台分とも、四〇〇台分とも、言われています）の建設が、市民の反対を無視して強行されようとしています。同時に、自衛隊の、中央即応集団司令部移駐が予定されています。増員される軍人軍属の住宅が問題で、「民間借り上げ」が増える危険があり、今回の沖縄の事件は、他人ごとではないのです。

三年前に、この（日米再編計画）の中間報告が発表されたときには、市としても、二〇万の署名を集め、「このまま黙っていたら百年先も基地の町」と反対したのですが、今は、反対の看板を掲げたまま、基地強化が進んでいます。政府は、「協力の度合いに応じて支払う」とされる再編交付金（今年度一億五、六〇〇万円）一人二〇〇円にもなりません）で、屈服を迫っています。最近、基地の中から、銃口を市民に向けたたり、フェンス近くで、銃を携帯した訓練が行われたり、「これ見よがし」の行動が続発。「私たちは戦争しているのだ」と平然と語る米軍の横暴が目立ってきました。

一月三十一日には、横須賀の自衛隊武山基地に、PAC3が配備されました。これで関東圏三箇所です。「射程距離二〇キロ、守備範囲は一〇キロ弱」というこの迎撃ミサイル発射装置を積んだ車列が、街を走り回るなど絶対に許せない！ イージス艦の衝突事故のようなことが、陸で起こりかねないのです。読谷村を訪ねたとき、こんな話を聞きました。「五階建ての米兵向け住宅が建つ」と聞いた周辺の住民が、裁判を起こしたそうです。ところが日本の法律では禁止できない。でも米軍には、「反対があるような所には住んでは、いけない」という決まりがあり、大問題になったそうです。辻、辻に、石敢塔を立てるように「戦争協力はしません」と、街から、職場から、旗を立てようではありませんか。社会を動かしている主人公は、私たち労働者、民衆なのですから。

（神奈川県・相模原市議会議員）

軍事で平和はつくれない

篠原 孝子

二〇〇一年に沖縄の名護市に移住してきたとき、沖縄は、「米軍基地と共生しているところ」だと思っていた。

その米軍が、「世界でどういうことをしてきたのか」を知ったのが、イラク戦争が始まる前だった。米総領事館前で、イラクを攻撃しないよう、抗議のハンガーストライキをしている人たちと出会った。そこで知ったのは、「バトナムやアフガンなどを攻撃し、民衆を殺し、傷つけてきた米軍」が、在沖米軍基地から出撃していたこと。そして、再びイラクで、同じ過ちが繰り返されようとしている、ということだった。

ショックだった。

日本も、同罪。私は、それを容認しなくなかった。

「何かしないと」という思いで、いっぱいになった。

次の戦争につながる辺野古への新基地建設は、どうしても止めたい。その一心で、現在も現地座り込みテント村に通って、「見たこと、聞いたこと、知ったこと」を、訪れた人に説明している。

アメリカの軍産複合体の儲けだけでなく、次に起こされる戦争には、日本の軍産複合体及び自衛隊も組み込まれるだろう。軍隊や武器が守るのは、国民ではなく、「国と戦争によって儲けるひと握り

の人たち」、そして「軍事基地そのもの」だ。「戦争に行かされる兵士も、その兵士によって殺される人びと」も、「基地被害を受け続ける人びと」も、「仕方がない犠牲」として片づけられていく。

*

私は、「こんなあり方を支えている無関心な国民にも、責任がある」と思っている。しかし、それを変えていける力を持っているのも、国民一人一人だ。その人たちを動かしていくには、事実を知った人が、どれだけ多くの人たちにそのことを伝え、各人の自分の問題として考え、行動してもらえるか、ということに尽きると思う。

それは、「認識を変える」ことから始めなければならないので、行き着くまでに、必ずいろいろな疑問や相違点が出てくるはずだが、それを丁寧に根気よく意見交換することが大切だと思っている。

それは、「〈基地は必要〉と考えている人たち」とだけではなく、「〈基地は要らない〉と思っている人たち」との間でさえも、だ。

*

米兵による女子中学生レイプ事件に関しても、「危険な米兵に何でついていったのか」「数人の米兵の事件・事故で、基地撤去というのは飛躍し過ぎではないか」という声が、県の内外からあった。

基地がある街では、生まれた時からあたり前に、街じゅうに米兵がいる。

大人は、「良き隣人」に、地域のイベントやゴミ拾いに参加してもらったり、基地内でのお祭りに家族ぐるみで出かけているのである。

「基地は、人を殺す訓練をしている所なんだよ」と言ったら、子どもたちが皆、「知らなかった」と

答えたことに、ショックを受けた」という学校の先生の話も聞いた。

「やっぱりアメリカ人といると格好いいって思うし」と、県内の女子大生が言っていた。つまり、「危険」という認識がないのだ。

でも、そうさせているのは誰だろう。

「軍隊が、軍事基地が、何であるか」を教えてこなかった大人の責任だ。

軍事基地は、「普通の若者を殺人マシーンにするところ」だ。海兵隊は、入隊すると、母親を否定することから教えられるという。軍隊にとって、女性は「支配物」だ。

*

屈託のない青年新兵が、イラクに派兵される直前に、ハイテンションで、奇声を上げながら、水陸両用戦車での訓練を行なっている姿を、有刺鉄線越しに間近で見たときは、怖いというより、あわれで、たまらなかった。平気で人を殺し、女性を見ればレイプする。「それがあたり前にできなければ、兵士として失格」だ。

「私たちが容認している日米軍事同盟が、世界からどう見られているか」も、考えなければいけない。「どういう結果を生み、この先どうなるうとしていいのか。」日本が〈脅威〉になっていくのだ。

そして防衛費が増えれば増えるほど、日本は、ますます危険な国となり、私たちの生活保障は削られ、市民が標的にされやすくなっていくということだ。

「仕方がない犠牲者」を容認する人たちが、いつのまにかその当事者にならないためにも、今、しっかりと、「軍事で平和はつukれないのだ」と、行動で示していかなければ、と思う。

(辺野古テント村の住人)

「大阪の女」も、立ち上がった

松野尾 かおる

二月十一日、テレビで、「沖縄で、米兵による少女暴行事件が起きた」というニュースを知った。

沖縄市長・東門美津子さんが、声を震わせ抗議している姿。県民の怒りの声。県内各地で抗議行動が続いている様子も報じられていた。日本政府の、「遺憾」「再発防止を米国と米軍に求める」などという他人事のようなコメントに、「あんたの責任だろうー!」と、画面に文句を言いながら、「そんな政府、そんな政治を許している自分」は、どうするのか、を問われた、と感じた。

本土の私たちこそが怒り、行動しなければ、と、〈三月行動をよびかける女たち〉事務局メンバーと、電話で連絡を取り合った。

十二日夜、翌夕の大阪のアメリカ総領事館への緊急抗議行動をきめた。

メールで〈転送大歓迎〉とつけて発信し始めたのは、夜の九時過ぎだった。五、六人ぐらいかな、と思つて行つた総領事館前には、三〇人が駆けつけてくれた。三月行動のメンバーだけでなく、「辺野古に基地を絶対つくらせない大阪行動」をはじめ、メールを見て来てくれた人たちだった。

領事に面会を求めたが、領事館側は、前面に警官を並べ、ロープを張って、誰も、出てこない。

抗議文を読み上げ、「少女暴行事件を許さない!」「米軍基地を撤去せよ!」と、みんなで声をあげた。何人かが交替でマイクをもち、怒りを、領事館につけた。ようやく警備?の男性が出てきて、抗議文を受け取った。

その週の土曜日、〈大阪行動〉は、定例の大阪駅前街宣で、急きょビラを作り替えて、この問題について、訴えた。

ビラには、「自分たちの運動が未だ現状を変えられてないこと」を厳しく問い直し、「あたかも今回の事件の責任は少女にあるかのような言説」に対して、心の底から強い怒りを覚える。『命の尊さに、軽いも重いも、あるはずがない。少女の尊厳は、米軍基地や日米安保体制の価値など足もとにも及ばない絶対的な重みを持っている。』どうか、この事件を、今一度、自分の問題として問うて欲しい』と、書いた。寒風が舞う日だったが、市民の関心は高く、ポケットから手を出して、受け取ってくれた。一時間半で、一千枚のチラシが、その手に渡った。

事件の真の原因は、〈戦争のための軍隊〉と〈基地の存在〉そのものにある。

米兵個人の「綱紀の弛み」ではなく、人を殺すための軍隊の訓練と、五年に及ぶイラクへの侵略戦争がもたらす兵士の疲弊、精神的荒廃にこそ、原因がある。

その後のイージス艦の漁船「衝突」事件をみれば、旧日本軍、米軍、そして自衛隊も、ぜんぶ「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓が、真実であることを示している。

アメリカと一体になって、戦争への道を進もうとする日本の政治のありかたが問われ、「それを自分たち自身の手で変えるのかどうか」ということが、とりわけ本土の私たちに問われている。

〈三月行動をよびかける女たち〉は、〇四年春、兵庫県伊丹基地から自衛隊がイラクへ出兵するのを黙っているわけにはいかないと、関西各地の女たちが一緒に行動したのがはじまりだった。

こういうときこそ大行動が必要なのに、現実には様々な理由で運動は分かれている。

それなら、「女性たちがまず、組織や考え方の違いをこえて、一緒に行動しよう」と、声をかけ合った。そして生まれたのが、第一回の「止めたいんや戦争！ 守るんや命！ 3・14行動」だった。

「行動」としたのは、沖縄の〈基地・軍隊を許さない行動する女たちの会〉が念頭にあり、女たちの呼びかけで、すべての人が「共に行動する」ことを願ったからである。

一回限りの共同行動のつもりだったが、イラク戦争と自衛隊の派兵は続き、「また、や、い、い、い、い、い」と、誰ともなく声があがり、翌年から毎年三月に行動をもち、今年で五回目となった。二回目以降、話し合いの中で、沖縄問題は不可欠のテーマとなり、毎回、何らかの形でとり組んできた。

*

三月行動は、「止めたいんや戦争！ 守るんや命！」を合い言葉に、組織も考え方も違うけれど、お互いの意見を尊重し、徹底討論を重ねることを、大事にしている。

在日女性団体も、一緒に行動してきた。

今年の3・9行動は、三六〇人が参加。沖縄の安次嶺美代子さん（前沖縄高教組委員長）から、「昨年の教科書問題の県民大会十二万人の結集は、いかにして生み出されたのか」というお話と、少女暴行事件について報告していただいた。

「三月行動を今後はどうするか」は、まだ決まっていない。

でも一人ひとり、そして手をつないで、ねばり強く、あきらめず、自分たちの住むこの関西で、行動していきたいと思う。

二度と「少女暴行事件」を繰り返させないために。

女性や子どもが平和に暮らしていける世界をつくるために――。

（大阪市・三月行動事務局）

2008年2月17日

アメリカ合衆国大統領
ジョージ・W・ブッシュ様

国際婦人年連絡会
世話人 江尻美穂子
橋本 葉子
平松 昌子

「在沖縄米海兵隊による女子中学生への暴行」に強く抗議します

私たち国際婦人年連絡会(全国組織41の女性団体)は、「ジェンダー平等と平和な社会」を目指して活動しています。私たちは、2月10日に起きた、米海兵隊二等軍曹による女子中学生への暴行事件に、強い憤りを覚えます。

在日米軍専用施設の75%が集中する沖縄では、米兵による「許しがたい性犯罪」が繰り返し起きています。これらは、女性の人権を蹂躪する重大な犯罪であります。米軍基地における市民、特に女性・少女への重大な人権侵害に対し、十分なケアと補償を行い、再びこのようなことが発生しないために、その防止と救済に関して日米両政府に以下のことを速やかに実現するよう強く求めます。

記

日米両政府は、

- 1 今回の加害者について、日本の法律に基づき適切に処罰すること
- 2 市民生活を著しく脅かす日米軍基地の、縮小・撤廃を実現すること
- 3 日米地位協定を、抜本的に改定すること

(ほかに、ジョン・トーマス・シーファー駐日アメリカ合衆国特命全権大使、福田康夫内閣総理大臣、高村正彦外務大臣、石破茂防衛大臣に提出)

〔国際婦人年連絡会は、1975年、故・市川房枝さんを中心に、全国組織の41婦人団体(〈あごら〉も含む)で結成。〈平等・平和・発展〉を、国連や世界の女性団体と共に推進しています。〕

座 談 会

根源を断つには、 基地問題に、どう立ち向かうか

出席者 親川 裕子（会社員）

友利真由美（会社社長）

知念 ウシ（ムヌカチャー）

司 会 桑江テル子（ 〃 ）

（ムヌカチャー＝沖縄の語で「もの書き」「ライター」の意）



左から 知念ウシさん、友利真由美さん、親川裕子さん

司会 二月十日に、またまた沖縄で、米兵による少女暴行

事件が発生し、怒りの声が湧き起こっています。三月二三日には県民大会も開かれます。きょうは、怒りの声をお聞きする」というより、「このような事件を本当になくすためには、どうすればいいか」——皆さんの意見をお聞かせ願いたい。「あーら」の「沖縄特集」で、全国に、発信しますので、忌憚のないご意見を、どんどん、おっしゃってください。とりわけ、六〇代の私などに比べて、皆さんのような三〇代から四〇代の若い方がたの意見を取り入れて、女性たちで運動していききたいと思います。



今回のことでは、北谷町の〈怒りの女性集会〉をはじめ、県内の全市町村議会が抗議決議をしました。県議会でも、抗議の決議をあげました。こういう県民側の行動や対応を、どう感じますか。

根本的な原因は、どこにあるのか

親川 事件があると、「綱紀粛正を求める」とか、いつも、

決まり文句。まるで、マニュアル化しているみたいですね。「九五年の事件」以降、マニュアルが作られているんじゃないですか。今回は、県の対応も、素早いものでしたね。

友利 私も同じです。何となく流れが出来ているみたい。私は詳しくないんですが、「詳しくない私のような人」にとっては、県が抗議決議することで、どう影響があるのか、どう利用されるのか、全く見えてこないんです。何度か、事件があるたびに、一度はワーストと盛り上がるけど、いつの間にか、うやむやになって下火になっていく。はたから見ていると「ポーズ」に見えてしまう。今回も、外出禁止令が出て、解かれて、「これを言っておけば、収まるんじゃないの」みたいな……。そう感じますね。

司会 「マニュアル」、「ポーズ」という言葉がありました。知念さんは、いかが？

知念 議論をする前に、ぜひ発言しておきたいことがあります。

「あーら」の読者の多くは、本土在住の方がたですよね。その方がたへのメッセージになるので、沖縄だけの「私たち身内だけの議論」では、ないのです。これは日本の安全保障の問題なので、それをちゃんと伝えたいと思います。

その視点でいうならば、同じ頃に起こったイージス艦の

事故がありましたね。あれも被害者が出たわけですが、防衛大臣があまりに行きし、辞職するかしないかの問題になるし、本土の新聞の一面にも載る。ずいぶん違いますよね。被害者が本土の間人であるかないか、男か女か、子どもか大人かで、扱いが違うわけでしょう。沖縄の問題というより、日本の問題なんです。それをまず言いたい。司会 そうですね。一つの大切な視点ですね。

「あー」の読者は、九〇%以上、本土の方がたです。その読者に発信したいですね。国、県、米軍への意見と同時に、本土の人へのメッセージも含めて、お願いします。

イージス艦の事例が出ましたが、沖縄でどんな大問題が起きて、決して大臣や総理の責任は云々されないですね。どう違うんでしょうね、考えてみなければいけません。

ここで、本論に入りましょう。この種の事件・事故・人権侵害を止めるためには、何をすればいいか。どうすればいいのか。どなたからでも、どうぞ。

親川 「米軍がいなくなってしまう」ことが、大前提だと思いますが、なかなか、いなくなってくれないので、どうすればいいのか。「日米地位協定の改定」とか言っても、

動かないですよ、政府は。

国は、あくまで、沖縄の内部問題にとどめたい。日米安保の問題にしないように、腐心しているのではないですか。だから、謝りにこないし、沖縄だけの問題にしようとしている。ライス長官は謝りましたよね。

知念 こんな格好（腰かけてふんぞり返って見せる）してね。紙面では、その下に総理大臣が、こんな格好（最敬礼）している写真が載せられていたわね。

親川 ああ。そう読み取ってくれる読者があって、よかったです。

これは、「日本全体の問題」だ

友利 事件や事故をなくすためには、やはり基地をなくすことだと思うんですが、それには、すごく時間がかかる。一部で、「少女が悪い」みたいな、心ない言い方があるじゃないですか。

県外の人が沖縄にみえるとき、〈いやし〉のいいイメージを持つ人がいる一方で、〈騒いでお金をもらうの、得意だよ〉という人も、多いんですよ。それは、実情を知ら

ないからだと思うんですけど、沖縄だけの力では、もう、どうしようもない状況なんですよ。何か、発言したとしても、あげ足取られる状況ですよ。

今回の女性の集まりに関しても、あげ足取りが多くて、悲しかったです。「日本全体の問題だ」ということを、沖縄以外の人が、もっと認識しないと、国も動かないし、基地はなくならないし、この島は発展しないと思うんです。

国の操作は、すごく簡単で、沖縄での出来事を本土マスコミがどう発表するかによって、内地の人は左右されると思うんです。

真実が見える人は、ごく一部で、どっちかというと「文句を言うだけ」のことになっている。それを打破しないと、基地問題や、沖縄でおこる事件・事故は、今までと変わらない状況が続くでしょう。

なぜ「ヤマトの問題だ」と認識されないのか

〈日本の問題〉としては、ほとんど認識されていないですね。私、大学は内地だったんで、当時の友だちが沖縄に来て、私が案内したとしても、全く〈基地〉にはふれないですよ

ね。「基地は当たり前」と思うんでしょくど……。

知念 何で「当たり前」と思うの？

友利 うん、旅行で楽しむために来ているから。

でも、私も、わざと話を出したり、安保の丘の周辺では、「すごいでしょう。広いでしょう」とか言ってみるんですが、「へー？」みたいな反応なんです。

旅行は、もちろん、「楽しむため」だから、そこで、どう感じるかは、その人の自由ですよ。反応を見ると、すごくむずかしい問題かな、と思う。

内地の大学にいる頃、九五年の事件が起こって、「オー、何てこったー」と、思ったんですが、それ以上の情報は、入ってこないんです。周りの大学生も、みんなそうなんです。いつも感じていることですが、県外から来ている活動家・運動家の人たちというか、——沖縄の運動家もそうですが、〈普通の人〉との距離を感じてしまうんですよ。

悪い例ですけど、那覇の大きい交差点などで、「署名お願いしまーす」と叫んでいると、「すごいがんばっている」とは思うんですが、近よりがたい雰囲気なんです。その人たちは、身なりなどは二の次。

「おしやれして」とは言いませんが、「清潔感のある身な

り」というか、人が寄ってきやすい雰囲気をつくることも、大事だと思うんです。これは、県外も、県内人も、同じことを感じます。

知念 さつき、「基地問題にふれないのが当たり前。なぜなら旅行は楽しむものだから」という発言がありましたね。だから、沖縄は、観光地にされていると思うんです。いろんな産業が振興されてしかるべきなのに、観光産業だけに特化してお金がおろされている。沖縄は、「見なくてもいい」「考えなくてもいい」「ただ遊ぶだけのもの」。——文化で遊び、海で遊ぶ。だけど、基地問題は知らない……。

私は、とても傷つくんです。あつちの論理では「当たり前」でも、こっちは、とても傷つく。観光産業の政策としての沖縄プーム、移住プームも、9・11直後は、ピタリとやんでいたのに、今は、家まで買って住むようになった。

この転換は何？ 理解できない。潜在意識的に「領土を確保しておきたい意識」があつて、それで、本土社会でついでいけない人を、先兵として送り出している。これでは、植民地ですよ。

本土社会でうまくやれない人は、革命分子になるわけでしょう。その人たちが踏みとどまって、日本社会を変えよ

うとしたら、革命が起こるかも知れないわけ。でも、その人たちが、「へいやし」とか言って、沖縄に来て、沖縄社会に入り込んで、あつちの常識を流布させたら、一石二鳥じゃない？ 国内に社会改革の分子を残さないで、送り出し、植民地をキープしているわけですよ。私たちよりもきれいな日本語をしゃべるから、それだけでもウチナンチュは憶してしまうしね。

チベットなら、「中国共産党が政策的にやつてる」と、みんな思うけど……、日本では「政策的ではない」ことになつて。同じような現象かな、と思います。これからは、「基地に反対するな」という声が、その人たちからあがつてくるかも知れないですね。今だって、「沖縄社会の墮落している部分をつついて、基地反対の論理的正当性をくずそうとする部分がいつばいある」と思っています。

リーダーたちは問題視しているか

司会 知念さんと友利さんの話を合わせると、本土人の意識が、沖縄人の意識とはずいぶん違つていて、乖離かいり、ズレがあり、基地への考え方が、まるでかみ合わない。

以上は、一般人の事例でした。では、社会のリーダーである政治家や国會議員たちは、どうだろうか？国会で、どのように論議しているだろうか。政治の場で、どう扱われているだろうか。そのことで、何か発言ありませんか。

先日、沖縄市長の東門美津子さんにインタビューしたところ、「自分は個人的には『基地撤去しかない』と思うが、基地で生活をつないでいる市民もいるわけだから、現実的には『応分の負担を』としか言えない。『本土の政治家は、沖縄の痛みを感じない』ことが、議員を経験して、いやというほどわかったから——ということでした。

「国民の安全のために日米安保が必要」なら、国民みんな荷物を分けあってかついでほしい。「沖縄だけに押しつけないで」と言いたい、と。

親川 地方分権というなかで、いろんな自治体が財政的にこわれていつていますね。

岩国でも、今度の市長選挙で、（基地に反対しない人）を、当選させましたね。

「基地を持つてきたら、それだけ見返りがある」かのように、国は装うわけです。「交付金も出すし、観光も公共事業も、IT企業の集積もありますよ」みたいに。だから、もしそ

うなら、財政難にあえぐ自治体から、基地の誘致活動があるんじゃないかと思っただんですが、ないですよ。危ないから。

危ないとわかってるから、「見返りがある」と知ってるけど、やらない。そのことを政治家も知ってるから、「道路つくりましょう」みたいに、「族議員」が増えていく。

どんなに危険なのかを知ってるからこそ、基地は、沖縄にとどめ置きたい。沖縄は、そういう地域であつてもかまわない。政治家もメディアもしかり。それでも私たち沖縄は、「基地ノー」と言つていく必要があると、私は思う。

知念 「基地再編で、沖縄からF15が行く」とか、あるわけですが、本土では「沖縄みたいになりたくない」「沖縄みたいな事件が起こつたら大変だ」とか……。

「なんと残酷で冷めた言葉を平気で使えるんだろう」と、思うんです。

米軍再編で、日米が一体化して軍事化が進むというとき、「本土の沖縄化」と呼ばれたんです。これも、何でこんな言葉使いが平気できるのか。じゃー、（沖縄のオキナワ化）は、誰がしたの？ 私たちは望んでないよ、こんな沖縄！

司会 友利さん、むずかしい課題だけど、どうですか。

「原発に無関心な沖縄」と、同じことでは……

友利 今、頭に浮かんだのは、〈原発〉です。同じように、みんなのために危険な施設を受け入れ、その見返りに設備がすすんだり、お金が落ちたりする。やはり、ここにも、反対・賛成がいる。少し違うかも知れないけど、国民レベルで考えたら、同じなんじゃないか。沖縄の人は、原発から電気をもらっているわけじゃないから、全く無関心ですよ。新潟とか、あの辺に原発があることを知ってはいるが、別に気にはしていない。「本土の人が沖縄の基地を見ると、同じレベルじゃないか」と思ったんです。

マスコミの情報操作で、暴動でも起こったら大変だと、負の部分は、あまり取りあげない。すごくむずかしいけど、でも、それが一番の、キーポイントだと思います。

沖縄は、観光産業を軸に経済を盛りたてているけど、「基地を受け入れたから、地場産業は発達しなかった。」という状況もある、と思いますね。

よく、「沖縄の人は働くのが好きじゃない」と言われます。時間がルーズ、勉強熱がない、失業率が高い、学力が最下位とか、問題があるじゃないですか。

「その中で生きていけるという社会」を作ってしまったんです。なんで、こういう社会になったのか。これは、「基地からのお金で、ぬくぬくとやっていたいける」という、甘やかされてしまったものがあると思うんです。（アメとムチ）ですよ。

私は覚醒剤、魔薬の話をするんです。やくざは、最初に無料で覚醒剤や魔薬をあげる。中毒になって、「欲しい」と言ったら、「じゃあ十万で売る」、「二十万で売るよ」と、いう。それと同じことを、日本政府は、沖縄に対してやっているんじゃないか。

そこに、沖縄の人は早く気づかないといけない。「食っていけるから、いいさ」じゃなくて、本土企業と競争できる実力を磨いていかないとけない。「公共事業がないと、生きていけない。だから、それに頼ってしまふ」のを打破するには、力をつけていかないとけない、と思います。

司会 議論は、いいところまできたと思います。国政にかかわる大きな選挙のたびに、いま言ったように、「沖縄の自立経済」とか「地場産業をどう育成するか」とか、「アイデンティティをどう守るか」（もう失われてしまっているかも知れませんが）が、よく、テーマになるんですけれど

ね。なかなか、現実結びついていない。

いま、「魔薬」という話がありましたが、「基地は諸悪の根源である」「基地の経済収入は魔薬と同じ」とか、言われています。でも、それを断ち切ることができていません。

「基地経済でうるおっている」は、幻想

知念 思うんですけど、「振興策」とか「基地からの収入」とか、私、何も、もらっていないんですよ。あなた、もらっています？（もらっている。給料いくら？ 本土企業と比べてどう？ など、しばらくやりとりあり）

誰がもらっているの？ ゼネコンで本土に還流しているのに、なぜ、そういうヤマトのゼネコンは問われず、私たちがもらっているように言われるの。基地がらみのお金も、沖繩は、そんなにもらっていない。普通のダンブ持つちゃー、タクシー持つちゃー、ウエイトレス、パート、もらっているかな？

親川 今の指摘、とても大事だと思いますね。基地経済で潤っているという幻想が、すごく流布している。沖繩経済への影響は五%ぐらいだと、記事が出ていました。

司会 復帰前の米軍支配下で二五%。復帰後は、どんどん低くなって、五%です。それでも五%は基地に依存しているわけです。先ほど、「もらっている」「もらっていない」の話がありましたけど、沖繩の軍用地主は、約一万人。そのうち三千人が、いわゆる一坪反戦地主で、地主の平均年間地代は約二百万円だそうです。ほんのひとにぎりの人ですが、億単位の人もあります。

「思いやり予算」の関係で工事がとれるから、「沖繩の土木・建築業は潤っているだろう」と見られがちですが、大きいものは本土ゼネコンで、地元業者は下請け、孫請けです。友利 昨晚、たまたま、下請け業者の人といっしょだったんです。その人の親は、毎日ゴルフさんまい。下請けでも、孫請けでも、五年ごとに契約さえすれば、仕事は、ちゃんと入る。「ああ、良かった」と思っている、と言うんです。だからといって、「基地賛成」とは言っていない。ゆくゆくは断ち切ったほうがいいと……。

その現実を見ると、競争原理が全く働いてない。資本主義では、「よりがんばって、より努力し、より頭を使って、成功する」のが、本当ですけど、今の沖繩は、そうではない。その現実を見てしまうと、やる気をなくしてしまふ。

「沖繩の人が、仕事や勉強に意欲的になれない」というのは、この現実を知っちゃってるから。

司会　そこが、沖繩のリーダーたちの出番だと思えますよ。やる気の県民性を起こさせ、誇りの持てる産業を起こしていく。そのために国はお金を出すべきだと、私、思っています。

米国の軍事支配に二十七年間もゆだねてきた。その責任のとり方は、それじゃないかと思うんです。そこで、「基地返還」と「あと地利用」のことがあります。普天間飛行場の「あと地」も、夢がひろがっていると思うんですが……。

親川　ヤマトのコンサルが入っていて、ひよつとして天久の二の舞いにならないか……。土地が返り、ハンビーにしる、天久にしる汚染された土地の回復にも金がかかった。

註1　コンサル＝コンサルタント

註2　天久＝那覇市天久——元米軍基地跡。返還後、不発弾、土壤文化財調査、地籍確定作業などを経て、土地利用に着手するまでに十一年を要した。現在は、那覇市の副都心として発展している。

註3　ハンビー＝米軍の飛行場跡地。返還後、町づくりによって、現在は商業地として発展している。

コンサルが入り、ゼネコンが入り、本土に還流されるの

を見てきた。雇用を生み出す産業づくりにすべきだと思うけども、でも、今のところ、あくまでも辺野古への移設が前提となった返還ですよ。ね。辺野古移設はどうなのか、ということも考えながら、あと地利用を議論しなければならぬですね。

司会　伊波・宜野湾市長がおっしゃっているのは、普天間は「閉鎖」「返還」であり、「代替施設建設ではない」ということです。海兵隊のグアム移転は合意ずみなのに、なぜ辺野古が必要か」ということですね。

友利　私、宜野湾市民です。普天間返還イコール辺野古移設。そういうふうに進んでしまつて、それがすごく心苦しいんですよ。わざわざ、海つぶして、上等の基地作つて、あそこの人たちに、今までなかった損害を与えるくらいだったら、それじゃ「ここに置いておけ」って言いたいんですよ。これは個人的意見で、どうとらえられるか、心配ですけど、とっても心苦しいんですよ。

「返還されたら何やる?」「公園つくる。」と言う。そういうハッピーな気持ちには、とてもなれない。「グアム移転で、辺野古基地は、なし」となれば、万々歳ですけどね。親川　あえて言うと、私は、グアム移転にも、反対なんで

すよ。伊波市長にも、「なんで、あえてグアム移転なんか」と、言いたいです。沖縄と同じ構図がグアムの中にもあつて、チャモロの人たちが、また被害を受けるわけですよ。

「結局、日米の共謀で、国がグアムをちらつかせて、そのことで、辺野古を見えなくさせようとしている」と思っています。普天間は、もちろん閉鎖・返還であるべきですよね。何で、また沖縄の中で、悩まされなければいけないのか。日米安保の問題だったら、「日本全国で分担しましょうよ」って、本当に、言いたくなりますよ。

司会 最後に、言い残したことがあればお願いします。

日本の〇・六%の面積の沖縄に基地の七五%が集中

知念 「沖縄は学力が低い」とか、言われるけど、沖縄の子は、興味ないことを勉強したくないわけさ。「失業率が高い」とかいけど、面白い仕事ある？ リゾートホテルか、ITか、コールセンターか、どれも面白くないさね。

「沖縄人が怠け者だとか頭が悪い」とかではなくて、これは、一つの抵抗だと思う。「やりたくないんだ」と、思う。また、^{註4}「ボーチャー者」という、悪い言われ方があるけど、取り

あげられた土地の損害賠償金でしょう。正当な権利でしょう。

(註4 ボーチャー者＝乱暴者)

いま本土の人が、どんな軍用地を買っているんです。軍用地代でボロもつけしているとか、働かないでもいい、とかいう人の数も、どれくらいのパーセンテージか。

まるで、「みんな」のように語られるけど、ごくごく一部の人。イメージがふくらんでいるのは作偽的だし、こういう層を作るのは、支配者の常套手段でしょう。こういう状況を変えるためには、真の自立経済をつくるためのお金を政府は投入すべきだということけど、するわけないわけさ。

「よく自立経済というけれども、〈基地経済〉と書いて、〈じゅうぞくけいざい〉とルビをふるのが、真実だから、政府がやるわけではない。」「本当に自分の足で立つためには、 unnecessaryな自己嫌悪はやめようや」とも言いたい。

いつも「沖縄人が悪い」「悪い」と言われ、自信がなくなる。自己嫌悪は、不要なんです。私たちは無力ではなく、ここまで来ている。もし抵抗しなかったら、沖縄は、もとと島じゅうが基地ですよ。それを止めてきたんですよ。ただ、権力が強いだけ。その権力を見抜きましょうよ。

沖縄の中で、普天間だ、辺野古だという話をするのでは

なくて、やっぱりヤマトに、日本に、戻しましょうよ。

でないとい、私たち国民の「思いやり予算」で、グアムを苦しめる手助けをすることになってしまふ。もしかしたら、沖縄の基地が全部グアムに移るかも知れない。

それでいいのか。日本の〇・六%の土地に、日本の基地の七五%集中しているのが、沖縄。本土の人が「安保は必要」というのだったら、とにかく、「本土に戻そう」「戻そう」と提起しよう。キャンブ・ハンセン、シュワープも、^(註5)
一九五〇年代に、ヤマトから移ってきたものだから。

註5 キャンブハンセン 沖縄県北部金武町在の海兵隊基地
註6 キャンブシュワープ 沖縄県名護市在の海兵隊基地

米兵犯罪や基地からの被害をなくすためには、本土の人たちに、ちゃんと言おう。それを言うことをためらうのでは、真の友人ではない。友情ではない。上下関係でしかない。連帯、友情、なら、考えてくれるはずです。

私は米兵にビラを流し、直接手紙を渡している。反発もあるし、「わかります」という人もいる。九五年の事件を知らないの、「何でこんなに怒っているの?」という米兵もいる。「あなたたちは好かれてないよ」ということを、

繰り返し伝えることで、「居心地悪いなあ」と、厭世感を広げる。兵士の志気を落とす。一%が動揺すると、パーツと広がるそうですからね。

私は、ヤマトと米兵と、両方に働きかけたい、と思っている。友利 意識をどう向けるかが大切だと思うんです。例えば、エコロジーも、はじめは、ほんの一部の人の関心事でした。でも今や、企業を動かしている。人の目をそこに向けさせ、一つのムーブメントにするには、見せ方が大事で、それを考えるのが近道かな、と思います。

私は、基地問題は知識不足ですけど、興味も関心もあります。安保とか地位協定とか言われると、「わかんない」、「どうしよう」、「無理かな」と思うんです。けど、興味の芽を摘むことは、すぐにもつたいないから、敷居を低くする工夫も必要だと思うんです。それを、今後やり続けると、ヤマト・インチュも変わるんじゃないかな、と思います。

親川 『あこら』の読者に言いたいことは、「沖縄だけの問題」にするのではなく、「沖縄はかわいそうだから一緒に闘いましょう」でもなくて、自分の生活の身のまわりで基地があつたら「自分だったらどうなるか」という、想像力を働かせてほしい。自分の問題に引き寄せて考えてほしい

と思います。

沖縄の人たちも、不必要な自己嫌悪はやめる。共感はしなくていい。「自分だったらどうするか」と考えるところから、何かが始まると思います。

司会 ありがとうございます。私も勉強になりました。皆さんにも、しっかり考えてほしいと思います。

(二〇〇八年三月九日)

あごら沖縄ツアーに
参加なさいませんか？

こんな魅力的なウチナンチュート、一晚、飲み、踊りながら、沖縄とヤマトのことを考えませんか？
(宜野湾^{ぎのわん}に泊って、基地のすさまじい爆音も体験)
ご希望の方は、〈あごら事務局〉まで、ご連絡ください。費用は出来るだけ安く計画します。

TEL 〇三―三三五四―三九四一
FAX 〇三―三三五四―九〇一四

ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を読みとく新聞です。

☎ 150-0001
東京都渋谷区神宮前
3-31-18

☎ 03-3402-3244
03-3402-3238

FAX 03-3401-3453

E-Mail femin@jca.apc.org

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

見本紙
ご請求下さい!!

大阪支局
☎ 530-0041
大阪市北区天神町
3-10-8-404
☎ & FAX 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ/毎月5・15・25日発行
購読料：年間3,000円・半年4,500円(送料込み)

自分で
考える人と
一緒に
考えたい。



窓

シイフ。され続けるヤポネシア (沖縄をふくむ日本)

平山 基生 もとお

三月二三日、沖縄県北谷公園は大雨だった。ぬかるむ会場は、カサかさ傘で埋まった。

目の前の野球場の、二階も三階も、ヒトひと人であった。「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」が、九九団体が参加する実行委員会によって開催された。自民党沖縄県連が、実行委員会の度重なる陳情、集会名称を変えてまでの超党派参加要請にもかかわらず不参加であることを、大会実行委員長は、きびしく怒りをもつて報告していた。仲井真県知事も、少女の告訴取り下げを「理由」として不参加であった。翁長那覇市長は、自民党でありながら、市民の意向を体して参加し、「日米安保体制のひずみを一身に担わざるを得ないことに満身の怒りと理不尽さを感じる」と述べた。翌二四日、参院予算委員会では、井上哲士議員（広島出身）、は予算委員会で質問し、米国防総省報告書によると、

米軍における一年間（〇六年一〇月～〇七年九月）の性的暴行が、報告数だけで、二六八八件に達し、米兵一万人あたりで見ると一八件で、日本社会の強姦と強制わいせつ件数（二人あたり〇・八件）の約二二倍にもなっていることを指摘した。さらに井上議員が示した外務省資料から作成した米軍人による主な性犯罪の表から〇三年以降を記すと、沖縄県金武町（五月）と岩国市（八月）、長崎県佐世保基地（一〇月）（以上三件、〇三年）、佐世保市（二月）、北谷町（八月）、神奈川県キャンプ座間（九月）、キャンプ座間（二月）（以上四件、〇四年）、沖縄市（〇五年七月）、横須賀市（〇六年六月）、沖縄市（〇七年十月）広島市（同月）、このたびの北谷町（〇八年二月）である。一二件のうち七件が「本土」、五件が沖縄県で起こっている。これは、「本土」と沖縄県の基数に、ほぼ比例している。

ちなみに沖縄県にある米軍基地(専用施設)数は三六(約四一%)であり、「本土」は五一(約五九%)である(沖縄県知事公室基地対策課資料)。よく「米軍基地の七五%が沖縄県にある」というのは、基地面積のことである。沖縄県北部の広大な山原が米軍基地に使用されているためである。

三月二三日の沖縄県民大会には、無党派層と社会大衆、共産、社民、民主、公明(創価学会)、さらに、心ある自民

支持層が個人として参加した。自民党県連と県知事は、不参加であったが、これは「脱落」であって、いささかも県民大会の超党派性は失われていない、と言うべきである。また、この沖縄県民大会には、私を含めて、「本土」から一〇〇人を優に超える人びとが参加し、実行委員会から紹介された。

二月一〇日に沖縄県で女子中学生が米軍曹から性的暴行を受けた後、「本土」東京在住の私が参加した、この事件に抗議する意味を持った集会だけでも、四つはある。一つは、神奈川県横浜浜市で三月八日に「糸数慶子参議院議員の講演とパネルディスカッション——米軍再編と神奈川の平和運動」が開かれ、女子中学生性的暴行への抗議が行われた。

翌日、東京で「みなと・九条の会」が糸数議員を招き、「沖縄から見る憲法九条」と題して、三周年記念集会を開いた。

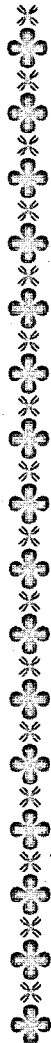
また、三月一三日には、平和フォーラムが「米兵少女暴行抗議集会」を星陵会館で開いた。これにも糸数慶子議員が参加していた。三月二三日の県民大会では演壇の真ん前で糸数議員の隣に居合わせる偶然が重なった。沖縄革新超党派推薦の同議員とは、米軍基地をなくす闘いにおいてご縁があるのかも知れない。イラク戦争五周年の三月二〇日には、雨の中、東京芝公園で「イラク戦争反対集会」が開かれ、同時に沖縄少女暴行への厳しい抗議が行われた。

「本土」民衆も、米軍の被害を受け、米日政府に激しく抗議している。沖縄に基地を押しつけているのは、米日政府であって、「日本人一般」ではない。最良の再発防止策Ⅱ基地撤去の闘いの勝利は、①党派を超えた結集、②沖縄と「本土」民衆の協同(結集)、③「国際的結集」、この三つの結集を実現するほかに道はない。

「やまと」には、沖縄県民の敵と味方がいる。また沖縄県自体にも、事実上米日政府を支持する勢力がある。「日本」という言葉が、沖縄を除く「ヤマト」を意味するのなら、作家島尾敏雄が使った両地を含めた言葉「ヤポネシア」の民衆の、更なる団結こそ必要だ。

(沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動共同代表・運営委員長)

会と催し



〈NPO現代の理論・社会フォーラム〉

「沖縄研究会」を立ち上げる

〈NPO現代の理論・社会フォーラム〉は、雑誌「現代の理論」の発行が、明石書店に移管されたのに伴い、言論NPOから再編された市民社会運動の集まりである。その発足を記念して、二月二三日に、「新春の集い」が行われた。

まず、内田弘氏（専修大学教授）の講演、「市民社会の三段階——東アジアの歴史理論的現段階の位置づけを目標として」を受けて、柏井宏之氏（NPOみずきの会理事）が「『東アジアと市民社会の形成』をめぐる、別の視点から」のコメント。会場からも含めて活発な質疑応答が行われた。

続いて開かれた懇親会では、同フォーラムへの期待と激励の発言があいつぎ、これからの活動の重要性和熱意を、参加者全員で確認した。全体として「市民社会を、理論と実践でつなぐ架け橋となる」という、同フォーラムの趣旨が、まずは、よく生きた集会だった。

一連の期待と提案のなかに、渡名嘉守太氏（沖縄国際大学非常勤講師）の沖縄問題への取り組み要請があった。

渡名喜氏は、琉球新報で行われた目取真俊氏と小林よしのり氏の論争に危機感を持ち、同紙上で五回にわたり、小林の「同調圧力」論批判を展開している。同フォーラム運営委員会は、さっそく渡名喜氏を中心とする継続的な研究会を立ち上げることを確認した。

第一回の会合は、三月二五日一八時～二一時に、専修大学、神田校舎7号館774号室で、渡名嘉守太氏を報告者に招いて開催する。この研究会は、その後も渡名喜氏を中心に、年に二、三回、氏の上京可能な時期を選んで継続する予定である。

渡名喜氏は、小林よしのりが企む「沖縄人の日本ナショナリズムへの統合」に抗して、沖縄「集団自決」問題を、「マイノリティに対する人権侵害問題」と位置づけ、問題を国際化するべき」で、そのためには、「沖縄人のアイデンティティーを確立し、日本を相対化する必要がある」と考え

ている。この沖縄民族主義ともいべきナショナリズムは、他者との共存を目指す市民社会と対立するのか、しないのか、といったところが研究会での議論の焦点となるだろう。

(三月四日記)

(牧 梶郎)

靖国問題を通して日本の平和を考える

三月七日夕、日本弁護士連合会の講堂、クレオで、日弁連主催「靖国問題を通して日本の平和を考える」という講演とシンポジウムが行われた。

靖国問題は、これまで、憲法第二十条「宗教の自由の保障」、「政教分離原則」の視点から、「首相の公式参拝が合憲か違憲か」というレヴェルで論じられてきた。

小泉首相(当時)の、靖国参拝をめぐる論議もそうであった。しかし、靖国問題の本質は、政教分離原則にあるのではなく、同条が、世界でも類を見ないような厳格な内容となつた背景——戦前、神道が国家と結び付き、国家神道として、日本の植民地支配、侵略戦争を支えた——にある「歴史問題」にこそある。

近年、かつての日本の植民地支配下にあつた国の人びと

から、自分たちの夫、父、兄らを、遺族たちの諒承も得ないままに、勝手に合祀——植民地支配下における日本名のみままで——していることに対して「合祀取消訴訟」が提起されるにいたっている。この合祀取消訴訟は、まさに歴史問題として、靖国問題の本質に迫る内容を持つものである。前記、日弁連シンポでは、水島朝穂早大教授が、約一時間にわたつて基調講演を行なった。

同教授は、靖国神社に合祀されている祭神中、古いものは井伊直弼を江戸城桜田門外で暗殺した水戸藩士らの死者であり、その後も一貫して、「天皇の軍隊の死者だけ」を祀るという「特殊な神社」であることを明らかにするとともに、「自衛隊海外派兵のための恒久法」が云々されている昨今、海外派兵による死者を祀る場所として、同神社が、再び論じられるであろう」と述べた。

そして、「国家が外に軍隊を送る場合に、不可欠なものとして必ず論議されるもの」として、金(保障)、名誉(勲章)、慰霊の三つがあり、「靖国問題は、歴史問題であるのみならず、極めて現代的な問題である」と訴えた。引き出しをたくさん持ち、自衛隊関係の小物をも駆使しながらの、「水島節」には、会場から強い共感の声が寄せられた。

続いてシンポジウムに移り、父親がニューギニアで亡くなり、靖国の遺児として、一時期、遺族会青年部で活動し、その後、この活動を批判して、脱会し、岩手県一関市（現奥州市）で「太平洋戦史館」を主宰している岩渕宣輝氏、立命館大学教授で、同大学コリアセンター長の徐勝氏が、パネリストとして発言し、コーディネーターは、日弁連、憲法委員会委員である、私、内田雅敏が務めた。

岩渕氏は、「戦後六〇余年を経た現在もなお、ニューギニアなど、南太平洋の島々で、約一五〇万人の日本の兵隊の白骨遺体が放置されているが、それを許しているのが、靖国神社が魂を呼び寄せ祀っている（合祀）という虚構だ」と、鋭く指摘し、戦前、陸海軍省の所轄であった靖国神社は、「軍事施設であって、決して宗教施設ではない」と喝破した。徐勝氏は、「靖国神社は、日本の近・現代史を、まるごと肯定しており、日本の植民地支配、侵略戦争に対する反省が全く見られない」と指摘し、「靖国問題こそ、東アジアにおける真の和解、平和実現に対する障害となっている」ことを、明らかにした。

小泉首相の退陣、安倍内閣の政権放り投げによって、靖国問題が論議されることは少なくなったことから、シンポ

ジウムの参加者は約一五〇名と、必ずしも多くなかったが、しかし、問題の本質は何ら変わっていないのであり、このような時期にこそ、冷静に靖国問題を論ずることができたシンポジウムではなかったかと思う。

（内田雅敏）

沖繩からは憲法がよく見える

〈みなと・9条の会〉は、三周年記念（第一二回）集会として、三月九日、麻布区民センターで、昨年九月二七日沖繩で開かれた〈教科書検定撤回要求県民集会〉に共感した人たちの、「ぜひ沖繩県民から話を聞きたい」との要望で、「沖繩から見る憲法9条」を開催した。

「軍隊は国民を守ってきたか」（参議院議員糸数慶子氏）、「憲法改正と9条の会のこれから」（9条の会事務局長・小森陽一氏）の後、八重山民謡の第一人者、大工哲弘氏が、オリジナル曲「憲法9条のうた」を披露。〈植竹しげ子とその仲間たち〉による「四ッ竹」の、華麗な舞。最後に大工さんの演奏で、会場三〇〇人総出のカチャーシーと横笛のなか、「ガンバロー」の歌と演奏で幕を閉じた。

（〈みなと・9条の会〉 高橋禮之）

深まった沖縄県民への感謝と連帯 松本剛記者（『琉球新報』）の講演

憲法（九条の会）調布のひろば（略称Ⅱ調布「憲法ひろば」）は、三月十五日午後、「基地・沖縄の現実と平和への志」に学ぼうと、『琉球新報』で基地担当を九年つとめ、現在は整理部で働く松元剛記者を招いてお話を聞きました。沖縄県民のたたかいへの連帯と関心の強さを反映して、毎月の例会参加者の倍近い七十七人が参加しました。

松元記者は、まず「戦後六三年、施政権返還から三十七年、沖縄に負わされた過重な基地の負担は何も変わっていません」と述べて、「今年二月一〇日に女子中学生が米兵の暴行を受けるといふ事件が起りましたが、九五年の少女暴行事件以降だけでも、十六人が、米兵の性のはけ口として、襲われているのです」。「爆音のもとで生まれる子どもが最初に覚える言葉は、『オトウ、オカア』ではなく、『コワイ、コワイ』なんです。大人も子どもも、睡眠を奪われ、心と身体を破壊され、故郷を追われ、一家離散する人びとも、絶えません」と、沖縄に生きる人びとの「苦しみと怒りの成り立ちと現在」を、静かな語り口ながら鋭く語りました。

さらに松元さんは、その沖縄での取材現場での米軍とのせめぎあいを語りました。

米軍ヘリの沖縄国際大学墜落事故（〇四年）の際の米軍による取材妨害と規制行動を記録した映像と、昨年一〇月の、『教科書検定撤回要求県民集会』の模様を伝える『琉球新報』紙面などを示してお話に、かたずを吞んで聞き入った参加者は、「九・一一同時多発テロの際は普天間基地ゲートで米憲兵が記者の額に銃口を突きつけ、カメラを奪い、追いつ返すという事件が起きましたが、これは有事の瞬間に、軍事優先の牙がむかれる現実を立証したものです」という、松元さんの警鐘を心に刻みました。

「基地被害、騒音と人権蹂躪に接して暮らす住民の苦しみを共有し、住民の目線で基地の弊害をただし、日米安保を問う——これが沖縄基地報道の軸足です」と、強調した松元さんは、そのような視点が本土の人びとも必要ではないかと、問いかけました。

「いま沖縄は、集団自決の歴史を否定する教科書検定を契機に、戦後三度目の『島ぐるみ闘争』に立ち上がっていますが、検定問題は沖縄問題ではなく、日本のあり方を問う問題です。沖縄からは、憲法がよく見えます」。

憲法九条は、沖縄の軍事基地化と引き換えに保障されたものですが、今日の『日米軍事融合』と基地機能強化は、その九条を、破壊しようとしています。沖縄基地の再編を通して、全国に危険が拡散されようとしていることを、本土の皆さんも、よく見定めて、〈憲法九条を引き寄せて危険を押し戻す〉ことが大切ではないでしょうか。

日本国憲法の小冊子を常に携えて仕事をしているという松元さんを、共感の拍手が包みました。

話し終わった松元さんは、その記者活動と、それを保障する『琉球新報』への敬意を込めた参加者の質疑応答を浴びました。息子さんがヘリ墜落現場を目撃したという吉田さんは、辺野古のV字滑走路の動向を質問。沖縄出身の外間さんは、「六〇年代からの狙いを今アメリカは実行に移しているのではないか」と実感を披瀝。長さんは、「沖縄密約のほかに密約があるのではないか」、雨宮さんは、「沖縄の基地面積は調布市の十倍、その密集度のイメージは？」など、問いかけをまじえて発言。田村さんは、「生きるために涙を呑む現実を見て、その辛さを思った」と、沖縄訪問の感想を述べながら質問しました。

松元さんは、一つずつ情報を深めながら、「かつて沖縄

経済の一四・七%を占めた基地関係収入が、いま四・六%に減少していること。基地返還後、一〇年かけて固定資産税収を八〇倍にでき、失業率も吸収できた経験も生まれている」と、ソフトランディングの展望を語りました。

（調布「憲法ひろば」世話人 鈴木 彰）

若者たちも怒りで決起！

「米兵による女子中学生暴行事件弾劾！」「すべての基地を撤去！」「辺野古・高江への新基地建設阻止！」など、沖縄のかかえる諸課題に向き合う若者たちの集会在、三月十六日、沖縄・那覇の県庁前の広場で行われました。

この日は、イラク戦争開始から五年。世界各地で、いっせいに行動があったそうで、イラクをはじめ、米国、韓国、イギリスからのメッセージも、紹介されました。

準備に当たってきた実行委員会の富田沙織委員長は、「私にも六か月の子どもがいます。戦争と貧困は、もう、ごめんです。基地は要りません。若者の未来をとりもどしましょう。若者の手で社会を変えましょう」と、

と、基調報告で、力強く訴えました。（桑江テル子）

4・6防衛省『人間の鎖』

4月6日(日) 午後2時30分～3時30分

人間の鎖 ①14:45 ②15:00 ③15:15

午後2時、防衛省正門側路上に集合

基地をけとばせ! ストップ! 米軍再編

基地強化を許さない交流集会

※4月7日(月)には防衛省要請等予定

同日午後6時(5時30分開場) 文京区民センター・3-A 参加費:500円

沖縄の新たな基地建設阻止から、各地の米軍基地強化反対と結び、防衛省へ

2月10日、沖縄で米兵による少女への性暴力事件がまたもや起こりました。沖縄戦がそうであったように「軍隊は住民を守らない」、基地ある限り軍隊による事件・事故はなくなりません。

この現状に対し、沖縄では新たな基地建設を阻止する闘いを続けています。この間、政府・防衛省は、辺野古で、環境影響評価の調査方法が確定する前から調査に入り、デタラメな調査方法書を作り直さず、3月にも本格調査に入ろうとしています。高江では、辺野古の新基地に配備する欠陥機オスプレイの訓練のために、新たなヘリ基地を居住地の周辺につくろうとしています。

また米軍再編では、辺野古への新基地建設を軸にして、各地の米軍基地を強化し自衛隊との一体化を進めています。横田、座間、相模原、厚木、横須賀、岩国等では、地元住民が粘り強く反対運動を続けています。PAC3ミサイルの自衛隊基地配備に反対運動が巻き起こっています。

4・6防衛省『人間の鎖』は、新たな基地建設を阻止し続ける辺野古の闘いから呼びかけ、基地強化を許さない各地元の住民・市民団体とともに手を携えて、政府・防衛省へ強く抗議します。たくさんの参加でアピールしましょう。



『ザ・レイプ・オブ・南京』

第二次世界大戦の忘れられたホロコースト

アイリス・チャン著・巫召鴻訳

同時代社刊

四六判274頁二〇〇〇円十税

本書は一九九七年「南京大虐殺」

六〇周年を期にアメリカで発行され、ベストセラーとなった著作の日本語訳で、昨年の七〇周年に合わせたように出版された。日本語版の刊行に一〇年もかかったのは、「南京大虐殺は、まぼろしであった」とする有象無象の右翼が、出版社に圧力をかけ、断念に追い込んだから、ということである。

今回も、同時代社が出版を決意するに際しては、右翼陣営からの相当の嫌がらせを覚悟したと聞く

し、翻訳と解説を引き受ける人間を、日本人の中に見つけられなかったのも、同じ背景によるらしい。

「南京大虐殺」については、日本の研究者からも、いくつか真実に迫る本が出されている（例えば笠原十九司『南京事件』岩波新書）。日本軍による拷問、虐殺、強姦といった蛮行は、これらの本でも赤裸々に暴かれているのに、なぜ、チャンのこの本ばかりが、今も、右翼を初めとする攻撃や良識的研究者の批判に曝されるのか。

一般的には、「この著作には誤りが多過ぎるから」ということになっている。しかし、訳者、巫召鴻の同時発売の解説書（『ザ・レイプ・オブ・南京』を読む）同時代社）が詳しく検証したように、一つの写真を除けば、大事な問題については、むしろ批判者のほうが誤っていたり、不当に事実をねじ曲げている。その意味で「ホロコースト否定論者の共通の方法は、些細な事実を取り上げて、ジェノサイドの範囲や規模から注意を逸らそうというものだ」という、チャンの反批判は正鵠を射ている。やはり、この本が虐殺人数の推定を「三〇万人」と、最大にしてあるのが、右翼に目の仇にされた直接の原因なのだろう。

また、南京大虐殺には、皇族であつた朝香宮の関与があり、昭和天皇の責任を仄めかしているところにも、右翼がいきり立つ原因があつたと思われる。さらには、「これらの犠牲者を日本の歴史修正主義の更なる冒瀆から救い出す」というチャンの執筆動機そのものに、危機感を抱いたのかもしれない。

それでは、良識的研究者の側はどこが不満だったのか。それは、「南京における日本人の心の状態」虐殺を実施していたときの日本の兵士と将校の心」を、チャンが繰り返して「理解できない」と語っている点のようだ。なぜ日本軍兵士が南京で、無差別な虐殺・強姦に走ったかに関しては、日本側に、詳細な研究がある。それをチャンは

踏まえていない、という不満である。

日本側の研究は、おしなべて「軍紀の弛緩」を、「上海事変以来続いた兵站補給なしの強行軍」に、その理由を見いだしている。それは、責任を軍部上層に負わせ、兵士は被害者だったと免罪することへと繋がりがかねない。それではチャンは、納得できなかったのである。

「南京の市民を責めさいなんだ日本人の多くが、日本政府による十分な軍人恩給と救済を受けているのに対して、何千人もの被害者は、沈黙の中で、貧困、恥辱あるいは慢性的な肉体および精神の苦痛に耐える日々を送り、今も送り続けている」という何げない指摘には、被害者の立場にこだわるチャンの痛切な思いがこめられている。

東京裁判で昭和天皇の戦争責任が免責されたことと併せて、そこには、加害意識の希薄な日本の戦後「民主主義」社会のあり方に対する、彼女なりの鋭い糾弾がある。それは、ある意味で、沖縄県民の心にも通じる、と言えるだろう。

その観点からは、本書の刊行が遅れたのは、安穩な戦後「民主主義」という「寝た子」を起こすことを恐れた、日本人の共同謀議だったと言えるかもしれない。昭和天皇がA級戦犯の靖国合祀に怒りを示したと伝えられるのも、同じ文脈で理解されよう。「もう反省したのだからそつとしておいてほしい。」本書を読むことは、そう考えている日本人にとって、ひとつの挑戦でもある。

(牧 梶郎)

写真絵本

「こんにちは泡瀬干潟」
あわせひがた

小橋川共男著

発行

泡瀬干潟を守る会連絡会

B4変形判48ページ

定価2000円(税込)

この一月、沖縄の写真家・小橋川共男さんの写真絵本「こんにちは泡瀬干潟」が出版されました。

空の青と白の砂浜の表紙をめくると、海草、藻場の草原、朝日に映える波紋の上の、光のダンス。

トカゲハゼ、イソスギナ、ハボウキガイ、ミナミコメツキガニ、ザルガイ、ガーラ、ルリマダラシオマネキ、海草ボウバアマモ、ウスキウチワ……などなど、四三枚のいのち輝く美しい写真に「交

じりあう潮の波紋にティダ踊る」

「たくましき大地の母乳あたたかし」などの短詩。目と心を奪われます。

小橋川さんは、日本リアリズム

写真集団会員で、これまでも写真

集『沖縄・御万人の心』『魚わく海・

白保』『四季のたより』『石垣島・

サンゴの海』などを出して、九二

年には、沖縄タイムス芸術選奨

奨賞を受賞。ご活躍が期待されて

います。

お問い合わせは、泡瀬干潟を守

る連絡会 電話とFAX〇九八

九三九一五六二二へ。(桑江テル子)

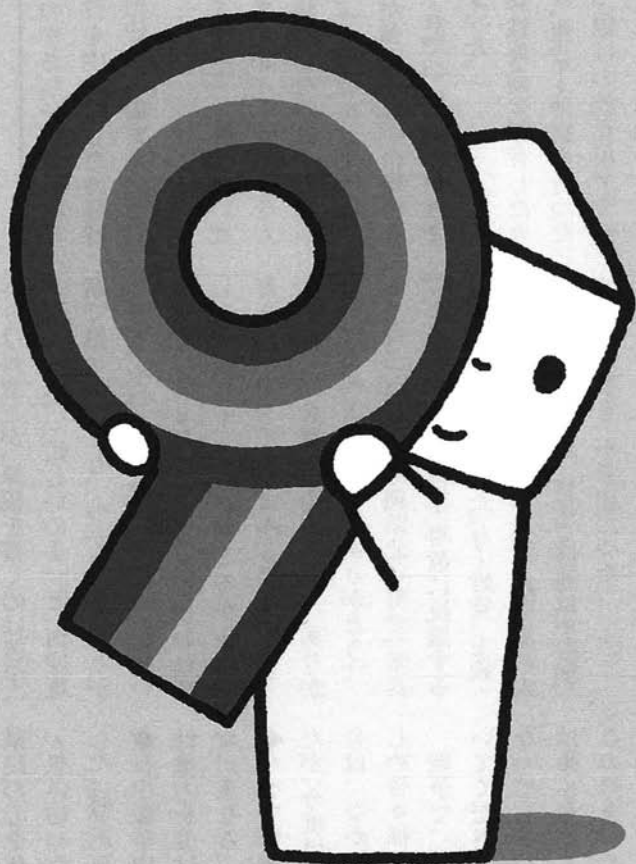


写真絵本

こんにちは泡瀬干潟

写真と文 小橋川共男

9 IN THE WORLD
**WHY
NOT
9?**



世界は、
9条をえらび
始めた。

2008.5/4・5・6 幕張メッセ

[9条世界会議]開催

GLOBAL ARTICLE 9 CONFERENCE TO ABOLISH WAR,
MAY 2008

<http://whynot9.jp>

「9条世界会議」日本実行委員会 / 03-5383-7861 article-9@whynot9.jp

〔編集後記〕

◆斎藤千代さんのやさしい声で、「次号は、少女暴行事件を中心にした沖縄特集にしたいの。桑江さん、編集長になって」とのこと。

「とんでもありません！ 私は短い文章なら引き受けますが……」——そんなやりとりを電話でしたのは、たしか二月下旬だった。でも、こんどだけは、斎藤さんの押しが強かった。「企画書を作りますから、それでいいなら、やります」と答えてしまった。

・あとが大変。女性集会を録音したカセット・テープが、東京→沖縄を行ったり来たり！ 真っ黒けの校正用ゲラがFAXされて来たり！ 怒鳴ったこともあった。

・にわか編集長の桑江は、と言えば、二年前の脳こうそくの体をかばいなが

ら、主要な方がたに原稿を依頼。「しゃべりは得意だが、原稿を書くのは苦手」と断わる人。「忙しいのよ」と、何度電話で追っかけても、つかまえることができず、やっと「居た！」と思ったら「いま出かけました」とイルスを使われてしまったり！ でも、日ごろからのつきあいが実つて、ほとんどの方は快く、「怒りの声」を寄せて下さった。ありがたい。ニヘーデービル（ありがとう）。

・三月二三日は、沖縄県北谷町で「米兵によるあらゆる事件・事故に抗議する県民大会」が開かれた。与・野党、主義・主張を超えて、文字どおり超党派の大結集を目ざしたが、自民党県連は不参加。仲井真知事も、不参加だった。

・九五年の県民大会は、八万五千人が結集し、大田県知事は行政の責任者として、胸うつ謝罪の辞を述べた。日米の同盟関係を気づかい、米軍基地再編計

画への影響をおもんばかっていては、県民の心を体现することはできない。

・思い切ったヤング層の座談会も掲載した。読者の反応はいかに？（桑江テル子）
◆日中戦争中、日本兵に拉致監禁され、性暴力を受けた中国の少女と沖縄の少女が重なる。この連鎖を断たねば。（光）

◆今まで何冊か「沖縄特集」を出しましたが、今度ほど「沖縄のホンネ」が開けた号は、なかったと思います。桑江さんはじめ皆々様に心から御礼申し上げます。

戦争で、命を削つてヤマトを守り抜いてくださったばかりに「基地の島」になつてしまった沖縄。しかも、その痛みは癒えることなく、年々深くなっている。この号を、できるだけ多くのヤマトの人びとに、読んで頂きます。（千）

三二七号の編集協力者

荻原有希／小俣光子／桑江テル子
斎藤千代／斎藤 涼／滝島典子

〈あごら〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……

心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。

〈BOC〉のご登録もどうぞ……

一九八〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごら〉会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一―九―四 中公ビル
電話 03-3354-3941 (代表) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごら 317号(沖縄発) 「沖縄の声」を聞いてくださいー少女暴行事件に想う

●編集 あごら新宿 ●発行 2008年3月20日 ●印刷 藤田印刷(株)

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル3F

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,000円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部



9784893061720



1920036010004

ISBN978-4-89306-172-0

C0036¥1000E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1,000円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団

BOC

各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

男女共同参画の
BOCシニアも

スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354-3941 FAX3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com

2008年も〈あごら〉をよろしく

平和と平等を追求する
『あごら』近刊シリーズ

「沖縄特集号」を読んで

あごら三十五年に想う I

あごら101〜200号一覧

サイレントマイノリティのBOC出版